

---

# Electric World

静野月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Electric World

### 【NZワード】

N5063Y

### 【作者名】

静野月

### 【あらすじ】

高校一年生の入野祐平は、オンラインゲームに没頭する毎日を送っていた。現実の世界ではいじめられっ子だが、ゲームの世界では【英雄】をやっている。

そんな祐平の目の前に、突然【霧谷龍樹】が現れた。

龍樹は、祐平がプレイしているMMORPG=Electric Worldのキャラクターだった。

雑魚モンスター、レイドモンスター、ゲームの中のキャラクターと、  
どんどん現実の世界にゲームの住人たちが現れてくる。

俺は……狂ってしまったのだろうか？

悩む龍樹の前に【管理者】が現れ、世界の真実が明らかにされる。

祐平は、現実の世界でも英雄になれるのだろうか？

突然、現れたゲームの中のキャラクターたち、暴れるモンスター。  
平和だった世界は壊れ、カオスとなっていく。

## 第一話（前書き）

MMORPGシリーズ第一弾です。

前作品（MMORPG - ダルシオン - ）とは、まったく別物ですが、オンラインゲームを通して主人公達の成長といつテーマで書いております。

ダルシオンは恋愛色の強い作品ですが（ちなみに電子書籍で売つてたりします……）、Electric Worldはもっと少年向けにな感じに……。

最後まで書き抜きますので、どうぞお付き合こよろしくお願い致します。>（――）<

## 第一話

制限時間は一時間。

時間内に倒さないと、討伐は失敗だ。

敵は、目の前に鎮座する巨大な怪物、ベヒモス。

頭部は象に似ており体は硬質の鱗で覆われている、グループ討伐用レイドモンスターである。

今回集まつたメンバーは、百人ちょい。

『シトロン』のメンバーが三十五人で、後は声をかけた友好ギルドの面々だ。

パーティ編成は、完璧だった。

近接攻撃型パーティ、遠距離攻撃型パーティ、それぞれ職別けをして回復役も十分にいる。

「龍樹<sup>たつき</sup>、全員配置に付いた。いつでも開始できるぞ」  
ナスカの声にコクリと頷く。

俺は両拳に装着した【ドラゴンナックル】にエレクトリックパワーを充電した。

ビリビリと体が振るえ、頭上から稻妻が降りてくる。  
ドカーンという雷鳴と共に、俺の体が黄金色に輝いた。

「ファーストアタック  
『FAいくぞ！ ビッグ・サンダー・アタック！』」  
掛け声と共に、ナックルから黄金の光が溢れ出す。  
ベヒモスに向かって拳を叩きつけ、戦闘が開始された。

一パーティが五人。

それが、二十一グループある。

ナックルを装備しているファイター、チーンソーを装備しているクラッシュジャー、ヨーヨーを装備しているトリックスターは前衛と呼ばれる近接攻撃型。

銃を構えているシューターは遠距離攻撃型。  
鞭を装備しているトルーパーは後方支援型の職だ。

俺のFAの後、一斉攻撃が始まった。

巨大な怪物のHPが、一ミリづつ削られていく。

ビッグ・サンダー・アタックは【英雄】だけが使用できる特化スキルだ。

だが待機時間ティレイが一時間と長いので、もう使えない。  
でも、始めに大ダメージを食らわせるのには大きな意味合いがあつた。

これで俺への敵対値が固定される。

「ダブル・パンチ！ ヘル・ブリッツ！ スクリュー・アタック！」

スキルの三コンボでエネルギーが、がたつと減る。

「フル・チャージ！！」

後方支援から、エネルギーの充電が行われた。  
出し惜しみすることなく、スキルを連発する。

ベヒモスが頭を高く上げ、両足を上げて鼻を上に持ち上げた。

「くるぞ！」

ナスカの緊迫した声。

これはベヒモスが最大攻撃スキルを発動する時の**体勢**である。

「ゲルウウウウウウウウウウウウウウ！」

地の底から沸きあがるような咆哮と共に、全員エネルギーを半分ほど吸われた。

「ギヤウウウウウウウウウウウウウ！」

「レインストームがくるぞ！ 各自、回復アイテム使って！」

ナスカが張り叫んだ。

討伐隊に、暴風雨が襲い掛かる。

トルーパーの回復スキルだけでは間に合わないので、俺も充電器をアイテム使った。

「おい、ヤバイぞ！」

誰かが叫んだ。

「ギヤウウウウウウウウウウウウ！」

一度目の咆哮に、全員が凍りついた。

「こんな……連続で発動させるのか？！」

俺はドラゴンナックルに、再びチャージを始めた。

「ミステイックガード！…」

もう一つの【英雄】スキルを発動する。

討伐隊の体が金色の粒子に包まれる。

「す、スゲー！俺、初めて見た  
「俺もだ。おいおい、ダメージがほとんど通つてないぞ」

沸き立つギルメン達を横目に見ながら、次の指示を送つた。  
「このままガンガン行くぞ！　トルーパーの充電が切れる前に止め  
の一斉攻撃だ！」

「おう！」  
「いくぜーーー！」

ベヒモスの体力が減つていく。  
そして……討伐が終了した。

## 第一話

「龍樹、お疲れ様」

後方で支援してくれていたナスカが、近づいてくる。

彼は【シトロン】のメンバーで、ギルドマスターである俺の良きサポート役だった。

今日のようなイベントがあると、指示系統を補佐してくれる。

俺だけでは、気の回らないことも多いので、彼の存在は大助かりだ。

そして同時に、ナスカは腕の良いトルーパーでもあった。

後方支援は、反射神経と瞬時の判断能力が要求される。

彼はその両方に秀でていて、ナスカの属するパーティは死亡率ゼロ%という伝説まである。

「ナスカも、お疲れ。今日は疲れただろう？」

「ううん、それほどまでは」

討伐をしたベヒモスからは大量のお金とアイテムがドロップし、今は、その分配が終わつた直後だ。

「いやー、しつかし、アレはすごかつたなー」

ギルドメンバーの声に、ナスカが頷く。

「ミステイックガードでしょう？　いいよね。あれ、カッコいいな

ー

「英雄なら全員使えるスキルなんだから、来月はナスカも頑張れよ  
「んー、愛燐がいる限り僕は無理だよ」

愛燐とは、トルーパーの英雄キャラクターだ。  
確かに彼も上手いが、名前に愛つて入っているクセに、どこか冷たい感じのするキャラクターだった。

もつとも、シトロンを立ち上げてから僕は他のギルドメンバーと狩りに行つたりする機会がほとんどなく、他職はよく分からないので下手なことはいえないが。

「俺は、ナスカの方が強いと思うんだけどな」  
そう言つと、少し声を詰ませる。

「ありがとう、龍樹。でも僕はいいんだ。君つていう英雄が僕のマスターなんだから」

そう、俺はElectric Worldの英雄だ。  
二ヶ月に一度開催される英雄バトルの霸者である。  
そして英雄は職ごとに一名選出され、英雄だけが持てる武器と技術スキルを与えられる。

ファイターの英雄にして、ギルド【シトロン】のカリスママスター。

それが俺、霧谷龍樹だった。

。

## 第一話

「ただいま

入野裕平イリノヒロヒロは、明かりの点いていないマンションに帰り、小声でボソッと呟いた。

返事を返す人はいない。

しーんと静まり返った居間の明かりを点けて通り抜け、自分の部屋に入る。

ベッドと勉強机が一式、漫画がぎっしりと詰まつた本棚。  
16歳の高校生とは思えないほど、田舎アシカたりも悪くシンプルな部屋だつた。

学校の制服を脱いでハンガーにかける。  
ブレザーの背中には乾いた泥で出来た靴底の跡が付いていて、雑巾でふき取らなければならない。  
それは事故やふざけあって付けられたものではなかつた。  
故意に。クラスメイトが付けたものだ。

兄が帰つてくる前に綺麗にしなくてはと手を早める。  
それでも、いくら隠しても恐らく聴い兄カズヤ「一弥の事だ。  
裕平が学校でイジメを受けている事に薄々気付いてはいる。  
それでも、あえて兄からイジメについて触れる事は無かつた。  
それどころか、祐平は、もう半年近くも一弥とまともな会話をえしていなかつた。

二人の両親は、仕事の都合で今年から海外に住んでいる。

それ以外は、兄一人、弟一人だ。

自由で気軽そうでいいと羨ましがる人もいるけど、実際はそうでもない。

兄は、しっかり者で文武両道の優秀な人間。

その出来の良い兄貴と相対するかのように、裕平は消極的な性格で

勉強もスポーツも得意ではなかった。

ダイニングキッチンに行くと、テーブルの上には、温めればいいだけのお弁当が置かれてあった。

一弥がバイトに行く前に、用意していつてくれたものだ。

家の中は綺麗に片付けられ、本当に、どこから、どこまでも非の打ち所の無い兄貴である。

だが、一弥が裕平を可愛がってくれたのは小学校低学年までだった。

一弥は、優秀なだけに出来の悪い裕平を蔑んだ。

自分が簡単に出来る事に、裕平が出来ないという事に苛立ちを感じ、相手をしなくなつたのだ。

裕平の消極的な性格も、兄の影響が大きい。

毎晩みてくれていた勉強を見なくなり、会話もしなくなり、次第に目も合わせなくなつた。

それでも、いつやつて、毎日の食事の世話や洗濯はしてくれている。

決して仲良くなれないが、まだ兄弟の絆は消えたわけではない。

だが祐平に取つて一弥は、一番身近に住んでいる一番遠い存在だった。

ピーシーピーシーピーシー。

電子レンジから温まつた弁当を取り出して、キッチンに置かれているテーブルでボソボソと食べる。

食べ終わつた空の容器を「ミミ袋」に突つ込んで、自分の部屋以外の照明を消した。

「ふう・・・」

子供らしくない溜息を吐いて、勉強机の椅子に腰掛ける。

机の横にはタワー型パソコンが置かれていて、指を伸ばし電源を入れた。

目の前の大型モニターにOS起動のロゴマークが表示される。手元にあるのは、キーボードとマウスとヘッドセットだ。祐平がヘッドセットを頭に被り、マイクを口元に寄せる。起動が完了して、OSの壁紙が表示された。

その中の一つのアイコンをダブルクリックする。

モニターに、大きく『ElectricWorld』という文字が

浮かんだ。

背景は、廃墟のような画像だ。

乱立する高層ビルは崩れ、高速道路も崩壊している。

世界は、どことなく全体的に暗く、威勢の良い音楽が鳴り響いた。

そう、『ElectricWorld』とは、オンラインゲームの一つである。

一年前に始まつたサービスでEWと省略され、いまやネットワークゲーム業界の人気ランキング一位常連となつたMMORPG（多人数同時参加型ロールプレイゲーム）だ。

裕平は、クローズドベータと呼ばれるテスト段階からEWに参加している。

それから毎日、このゲームをするのが日課であり唯一の楽しみだつた。

EWにIDとパスワードを入力する作業は無い。

それがEW最大のウリであり、今までのネットワークゲームとの大きな違いだ。

その秘密は、特別製のヘッドセットにあつた。

このヘッドセットは、装着者の脳波を感じし操作を行うEW専用のコントローラーなのである。

ログインサーバーは、この個人を特定する脳波を感じしてキャラクターを起動させる。

このシステムは複数アカウントの保有を防ぎ、『業者』と呼ばれるゲームマネーをリアルマネーで販売する人たちを追い出した。

そして、ゲームの操作方法まで、革新的に変えたのである。

## 第一話

「ElectricWorldへようこそ。キャラクター 霧谷龍樹 さんがログインします」

ディスプレイの画面が暗転し、刹那、眩い光りの世界が広がる。

ミッキーナ： あ！マスターがキタ＝＝＝＝＝ヽ（。 。 ）ノ＝＝＝＝＝！  
泰造： 龍樹だー！ オハー！  
シユン： たつちやんだー！ じんちー  
じっこ： こん～  
あかり： じんばんわー！  
ナスカ： じん～

次々と、引っ切り無しに挨拶が始まった。  
視界に広がるのは、先月の戦争で獲得した新しいアジトのロジングだ。

細身に見えるが筋肉質の長身に、長めの茶髪。  
瞳の色も髪と同じブラウンで、装備は最強だが、オシャレ装備の『ガクラン』をグラフィック加工した黒い装備。

そして、画面に広がるのは造られた仮想空間の世界である。

データの読み込み作業が終了する。

入野裕平は、霧谷龍樹（キリヤタツキ）となつた。

姿が見えないのに声が聞こえてくるのは、ギルドボイスという機能だ。

ギルドボイスとは、ギルドに加入している者だけが聞こえる特化音声チャンネルである。

ギルドの名前は【シトロン】。

総数五十を超える大所帯で、今は三十一名がログインしている。

そして龍樹は、その頂点、『シトロン』のギルドマスターだった。

龍樹： こん。みんな、早いな。ちゃんと飯食つてる？

龍樹は、あまりにも多いメンバーのログイン数に驚いた。

今日は平日で、水曜日だ。

ミツキーナ： 食べてる！ 食べてる！

泰造： ミツキーナなんて、一日五食食つてるらしいよ

ミツキーナ： んもう、失礼ね！ 私はね、超ナイスボディーなの

！

シュン： キャラクターがね

ミツキーナ： ぢゃない！ リアルよ！ リアル！

三十一人もいると、さすがに騒がしい。  
だが、これこそがM M O R P G = 多人数同時参加型ロールプレイゲームの醍醐味である。

声はリアルの声がそのまま反映されるか、ゲームで用意された音声を選択できるシステムで、みんなほとんど声優のボイスを使っている。

だから同じ声優の声を使っているとややこしい事になるので、画面には話しているキャラクターの名前が点滅をする仕組みになっている。

あかり： 早速なんですけど、龍樹さん、一緒に【ビックブラフト】のダンジョンに行きませんか？

その発言に、ミッキーナが待ったをかけた。

ミッキーナ： ちょ、うちらだつて龍樹待ちだつたんだから！ 今田こそ、一緒にクエスト進めようよ。マスター、最近、手伝いばつかで自分のクエスト進んでないじやん

ミッキーナのちつとは遠慮しろよ！ みたいな発言に、あかりが萎縮する。

あかり： そ、そうですね。すみません……

一瞬、ギルドチャットが静かになつた。

龍樹： おいおい、待てって。みんなせつかちだな。俺は、色々と忙しいの。準備できたら、適当にどこかのグループとつるむから、俺抜きで行きなさい

リーダーは、ギルドのムードメーカーだ。

まとめるのはもちろん、ロケイン接続すると一気にギルド内の空気が変わると言われている。

シトロン内部でも、それなりに仲良しチームみたいのが出来上がっていたが、龍樹は、どこにも所属しないようにして、上手く立ち回っていた。

それが、大所帯をまとめるギルドマスターの役目でもあり、内部分裂をさせない一番の方法だ。

そして龍樹は、この世界で一番有名なギルドのリーダーであり、職を極めた英雄であり、男女問わず憧れ的存在だった。

もちろん装備も良くレベルも高いが、慕われる一番の理由は人柄だ。優しく男氣があって、面白いし面倒見もいい。

それに龍樹は、対人戦のセンスが飛びぬけて上手かった。

EWは、脳波の信号をヘッドセットに取り付けてある装置が感知してキャラクターを動かす。

歩いたり走ったり、という移動だけではなく、飛んだり、スキルを発動したり防御したり と、他のロールプレイゲームにはな

い格闘ゲームの要素もあった。

マウスとキーボードだけでは大変だが、特別製のヘッドセットで操作する事によつて可能になつたのである。

霧谷 龍樹はギルドメンバーの象徴であり、誇れるリーダーであり。『ElectricWorld』の世界のカリスマ的キャラクター。そのため、いつも【シトロン】に入りたいという希望者が多くて困つている。

それでも、不特定多数のメンバーを加入させることは不可能だ。ギルドはマックスの人数が決まつていて、五十五名までしか受け入れられない。

今は、そのマックスの状態なので、誰かが脱退しないと新しい加入者を受け入れることができないので。

シウン：ねえ、たつちゃん。まだ来月にならないとギルドの空き作れないよね？ 最近、Bolidとかインないけど……

シウンは、龍樹と同じファイターだ。高レベルで操作も上手くシートロンの中心的人物の一人だつた。

そしてBolidは、三ヶ月前くらいに加入したトリックスターだ。最初の頃は毎日接続<sup>イン</sup>していたが、最近はめっきり顔も出さない。

龍樹：一応、三ヶ月接続がない場合は強制的に脱退させるつていう制約だし。もう少し待つてくれないかな。俺も彼を待ちたいし  
シウン：うーん、そうだよねえ。僕も、Bolidが嫌いでこんなことを言つてるわけじゃないんだけど、どうしてもカレンを入れたくてさ。ごめんねえ

カレンとは、最近、シウンとつるんで狩りに行つて他のギルドのトルーパーだ。

シウンの話によると、元々、シトロンに加入したかったらしく、メンバーの空きを待つていてのことだった。

シウンと話していると、ミックキーナから耳打ちチャットが流れてくれる。

耳打ちチャットとは、一対一の会話ができるシステムで、これで話すと他のメンバーに声が聞こえなくなるのだ。

ミツキーナ：【シュンは、ああ言ひあやつてゐるけど、本当はそんなに「コ」に来たいわけでもないらしいよ】

ミツキーナの声に、龍樹が眉根を寄せた。

龍樹：【そうなの？】

ミツキーナ：【シュンが入れ込んでるだけ。本人は付き合つてゐる気分でいるみたいだけど。なんだかアホみたいに装備やらなんやら貰いでてさ、自称二十一歳の女子大生つて言つてるみたいだけど、本当は男で二ートなんじゃないかって噂】

龍樹：【なるほどねえ】

女のふりをして近づき、貢がせる。

そんなトラブルは、ネットゲームでのお約束みたいなものだ。もつと酷い、現実の詐欺に近い行為も多い。

ミツキーナの話によると、シュンもその手の詐欺に引っかかっている様子だった。

下手に加入をさせても、もつと被害が拡大するのも困る。

龍樹：【情報あり。カレンのことはこっちで対処するよ】

ギルドマスターをしていると、同じギルド内だけではなく、他のギルドからも様々な情報が入ってくる。

Electric Worldには、現実の世界と引けを取らない政治とコネクションがあつて、立派に国家のようなものができているのだ。

ヒヒ： そう言やあ、龍樹さん、昼間、また『血の契約』の奴らが低レベルの狩場で暴れたらしいですぜ

『血の契約』とは、ゲームの趣旨を対人に絞ったギルドだ。

通常は暗黙のルールで高レベルのキャラクターは、あまりにもかけ離れた低レベルの狩場を荒らさないものだが、『血の契約』は【いかにも自分達よりもはるかにレベルの低い】キャラクターを専門に攻撃を仕掛けている無差別テロ集団のような組織である。

一撃で、もしくは攻撃を返しても無駄な抵抗で終わらせて殺すというのが楽しいらしく、この世界でもっとも嫌われている集団だった。

もちろん、全てのファイールドはPvPファイールドといって対人戦ができるので、ゲーム的には何も違反はしていない。

『Electrict World』は、もともとが『対人ゲー』と呼ばれているゲームで、PvP（Player vs Player）が主流だからだ。

常に敵対勢力があり、争いながら陣地を奪取したり防衛したりを繰り返す。

だが、それなりにローカルルールのよつなものができあがつており

『血の契約』は、全ギルドに共通する【敵】であった。

龍樹：  
んじや、ちょい巡回すつかな

ミッキーナ・え？！んじゃ、あたいも行く～！――

泰造  
：  
俺毛

シヨン： みんな、 すりーぞ！ 僕も行く！

レーベンホークは、1635年1月2日、スコットランドのアバディーンで生まれた。

俺も自分もど 途端にギルドモヤツトか艶ヤカになつた  
龍樹： おいおい、三十人で巡回したら、一生、あいつらアジトから出てこないぞ

と苦笑する。

龍樹の職は、ファイターだった。

前衛職と呼ばれ裝備はナックルで、戦闘は肉弾戦だ。

このケーブルは、他にも五つの暗があり、それぞれ特化した性能と装備がある。

フレイヤー達は、その職性能を最大限に応用して操作を行っていた。

そして、プレイヤーの技能次第で、その操作の腕が歴然と変わるもの【Electric World】の特徴だ。

同じ最強の装備を揃えてしまうと、キャラクターの強さが横並びをしてしまうゲームとは、まったく異なる。

あくまでも中身の勝負。

それが、このゲームがネットゲームランキング常時一番人気を誇る最大の理由だった。

シウン： あいつらって、絶対、レベルや人数が同等の時は、ガン逃げすんだよな

と、シウンが怒りの声をあげる。

ヒヒー： んだな。よほど腕に自信が無いんだろうな。可哀想なヤツらだよ  
と、ヒヒーが茶化した。

ガン逃げとは、敵の姿を見かけただけで逃げる行為。  
あくまでも無理をせず、確実に倒せる相手だけを狙うのも、一つの  
プレイスタイルだ。

たかがゲームの世界。

だが、されどゲームの世界。

そこには立派な社会というものが成立していて正義や悪も出来上がつていた。

そして、ギルドには横のつながりというものもあり、政治的因素も孕んで構築されていく。

龍樹は、そんな世界で、立派に【自分】といつ椅子を手に入れていった。

(あ・・・)

玄関が開いた音がする。

裕平は、賑やかなチャットを聞きながら、ヘッドセットを少しづつ  
し耳を澄ました。

ガタッ。

物音がするのは居間の方向だ。

こつちの音が入らないように、慌ててマイクの音を消音ノイズした。

本棚に置いてある時計をチラシとみる。

時刻は午後八時。

兄が、こんなに早く帰宅するのは珍しい。

なんとなく。

楽しそうな会話や笑い声を一弥に聞かれたくなかった。

ゲームばかりしているのがバレたら、一弥は益々裕平を軽蔑するだ  
るつ。

裕平は、風呂に入るフリをして、こつそりと居間を覗いた。  
視線に気がついた一弥が、探し物をする手を止める。

「……ちょい友達から借りたブルーレイを取りにきただけだから」

一弥はコートも着たままだ。

整理されたディスクの列から一枚を引き抜くと、ケースに入れて立ち上がる。

「今日は、泊まりで帰らない。内側からチエーンかけて寝ろよ」

裕平は、

「分かった

と、小さく頷いた。

風呂場まで行つてホツと胸を撫で下ろす。

よし！

これで、今夜は眠たくなるまで遊び放題だ。  
と、小さくガツツポーズを作つた。

裕平にとってはEWの世界の方こそが、本当の自分の世界だった。そこには、素直に自分を表現し、発言をし、誰にも抑制されないといつ自由がある。

それに、そんな、さらけ出した自分を認めてくれた仲間がいた。

だが、

裕平は、洗面所の鏡に映った自分を覗き込んだ。

ボサボサの納まりの悪い黒髪、気の弱そうな童顔に、低い身長、弱々しい体格。

これが、現実の入野裕平。

真実の姿である。

本当は、自分だって、こんな姿に生まれたくなかった。

同級生にはイジメられ、親や兄貴には遠慮をし、ビクビクしながら生きている人生なんて「ゴメンだった。

なれるものなら。

こっちの世界でも、現実の世界でも霧谷龍樹になりたかった。

龍樹は【Electric World】の英雄であり、同時に裕平にとっての英雄でもある。

それが、龍樹という存在なのだ。

だが、それは、あくまでもネットワークゲームの中の存在であり、たかだか「データ」遊びの履歴だ。

ゲームのサービスが終了してしまえば、同時に龍樹も消える。

そうなつたら、何もかもオシマイだ。

ゲームというものには簡単な【死】というものが待っている。

もちろん、このゲームが直ぐに終了する事はない。

人気があるネットワークゲームは、どこも十年以上続いている。

【Electric World】は、まだサービスが開始してから一年しか経っていない。

運営会社も大手だし、接続人数も日本最大級だと言われている。

ボイスチャットによる翻訳のシステムが搭載されれば、世界十二カ国で同時接続が可能になるという噂もあった。

ネットワークゲームは、開始してから何年か経つと接続人数が激減し、社会人になつたり他のゲームに移つたりしてプレイヤー達が消えていく。

その問題を解消する為に、いくつかのサーバーを統合したりして対処するのだが、それを世界規模でやろうという計画だ。

そうなつたら、ゲームの中で国家規模の戦争が起ころ。もしくは、違う国の人たちと徒党を組んで暴れまわるのだ。

その、今までになかつたような機能が実装されるという噂が広まつた為【Electric World】は予想以上のプレイヤー数を獲得している。

だが、同時に社会現象になるまでの問題も引き起こしていた。

それは【廃人】の量産だ。

『廃人』はネットゲーム廃人の略で、一種の病氣である。

ネットワーク廃人とも呼ばれ、学校にも行かず仕事もせずに毎日家に閉じこもつて、ひたすらゲームで遊び続けるという類の人間が【Electric World】の世界には溢れていた。

廃人二ートとは、通常、ダメ人間の象徴であるが、裕平は、そんな人たちが羨ましかつた。

社会人や所帯のある人に比べれば遙かに接続時間が長いが、それで

も足りないくらいゲームの中でやりたい事がある。

放課後と学校が休日の時間だけでは足りない。

もつと龍樹をプレイしたい。  
もつと、龍樹でありたい。  
と。

現実の世界は嫌いだ。

つまらないし、最低だ。

学校は虚められに行っているようなものだし、両親は兄ばかり可愛がっている。

自分はいらない子。

現実の世界では、必要の無い存在なのだ。

バタン。と、扉が閉まる音がした。

兄が出て行つたらしい。

龍樹は、脱衣所から自分の部屋に戻つた。

ボイスチャットをオンにして、キャラクターを動かす。  
みんなが、待つてました！ と、パーティ勧誘を飛ばしてきた。

龍樹： そんな、何個も入れないって。いいか、狩りに行くパーティと巡回に行くパーティに振り分けるから。今夜は、交替で【血の契約】を追いかけるぞ

了解！

そうこなくっちゃー！

元気良く、目の前のキャラクター達が飛び跳ねる。

龍樹は大勢の仲間に囲まれながら、アジトを後にした。

。

## 第一話

ガツ！

頬を殴られ、裕平はアスファルトの上に転倒した。

人通りの少ない路地裏。

明かりは乏しく、仄かに浮かび上がる顔は、苦悶の表情だ。

殴った少年が、倒れている少年のカバンを漁る。

「お、まつたコイツ、こんなに持つてるぜ」

財布から札を抜き取り、乱暴に、カバンを少年の体に叩きつけるように戻した。

「昭成アキナリと誠マコトに、一千円づつ。残りの五千円は俺な」

多少不公平な分配だがニヤケ顔で受け取る一人の少年は、楽しそうに倒れている少年に手を振っている。

「いつもいつも、俺たちにお小遣いあんがとねー」

「いやー、悪いねえ。入野くん」

入野裕平イリノ ユウヘイは、冷たい壁に寄りかかってたまま、視点の定まらない瞳で大柄な少年を見上げている。

関口礼一セキグチ レイジは、その裕平の抵抗するワケでもない、無気力な態度に再

びイラつとした。

始めのうちは「止めてくれ」とか「金ならあげるから」など、泣きながらも叫んでいたのに、最近は黙つて殴られる一方だ。

礼一にとつてイジメとは、無力なものが無駄な抵抗をするから楽しいのであって、人形のようにただ黙つて殴られているヤツを構つてもつまらない。

ぐつたりとした祐平の胸倉を掴み、べつと顔に唾を吐く。

「お前が、生きてて楽しいの？」

その無慈悲な質問に、祐平は答えなかつた。

どうせ、何か言い返せば、更に殴られる。

だから痛いと顔を顰める事もなく、無表情に徹するしかない。

礼一の不良グループが、祐平をイジメのターゲットにしたのは高校に入学してから間もない頃だ。始めは、休み時間の使い走り。

その内、機嫌が悪くなると殴るようになつた。持ち金が無いと言つてはカツアゲされる。

出さなかつたら、精神的な苦痛を伴うイジメをされた。

礼一は体格が良く、気性が激しくて近所の不良仲間とも繋がりがある。

下手に反抗したら、界隈を歩くことさえできなくなる。

裕平は、このまま地獄のような日々を送りたくは無かつたが、卒業

するまでの辛抱だ、と諦めていた。

学校が変われば飽きるだろう。

だから、それまで我慢するしかない。

クラスメイトは、自分達に火の粉がかからないように見てみぬふりをしていた。

先生たちも、面倒くさそうに知らないふりをしている。

「お前や、もう死んじゃえよ」

礼一が、ぐつたりとした裕平に向けて拳を握った。さすがに、昭成と誠がギョッと目を剥く。

ガツツー——ン——！

頬を殴打され、目の前に星が散った。

裕平の眼鏡が壊れて吹き飛んだ。

「お、おい。礼一、やり過ぎだつてば

「まことに、通報されるぞ？」

裕平の口元から、紅い糸が垂れ下がる。口の中が、じゅつじゅつして、鏽びた鉄の味がした。

「俺、コイツ見ると、無性にイクつくんだ。ほんと、いぢねーヤツって感じだぞ」

殴った礼一は、しひつとしている。

昭成と誠は顔を見合させて、肩を竦めた。

祐平の頬は赤を通り越して紫に腫れ、完全に視点が合っていない。

本格的に日が傾き、路地裏には冷たい風が吹いていた。電柱の外灯がポツポツと点灯を始め、東の空には星も見え始める。

礼一はボロ雑巾のようぐつたりとした裕平を壁際に転がし、自分のカバンを誠から受け取った。

「お前ら、もう行くぞ」

昭成と誠が、後ろからヒョコヒョコと付いてくる。

つまりない、どうでもいい世界。その、どうでもいい世界にいる、つまりない人間。

礼一にとって、その代表が『入野裕平』だ。

これといって理由は無いが、生理的に嫌いだとでも言えればいいのだろうか。

大人しく、クラスでも目立たない存在のはずの裕平だが、なぜか妙に、その存在が許せないのだ。

礼一の家は、かなりの資産家だ。

高校にも多額の寄付金をしているため、何をやつても退学にはならない。

教師は全員、腫れ物に触るかのように接していくし、金にだつて困つていません。

不良と一緒にバカをやつても、優秀な兄と弟がいるため、親さえも見捨てていた。

そんな礼一に取つて、人間とは「ゴミ」だった。

ただ世界に寄生しているだけのくらだらない生き物。

それが人間であり、全世界の「ゴミ」だ。

そして祐平はその象徴で、生きているだけでくだらない「ゴミ」の代表だった。

こんなヤツは早く死ねばいいんだと、物騒なことを考える。

カツ。

靴音を立てて、ぐつたりとした祐平の視線の先に人影が現れた。目を細めても、夕日が眩しくて全貌まではよく見えない。

「ねーねー、これ三対一?！」

この場の緊迫した空氣に似合わない能天氣な声に、礼一、昭成、誠の三人が一斉に振り返った。

一体、どこから現れたのだろうか。

その青年はあるで、ふつと沸いたかのように姿を現した。

自分達と同じくらいの年齢の、茶髪に長身の青年だ。細身に見えるが腕まくりをした肘から下の筋骨は隆々としていて、少し長めの前髪からは、形の良い切れ長のブラウンの瞳がキラリと輝いている。

だが、服装が妙だった。

一見、制服にも見えるが、派手に改良してあってコスプレみたいだ。

「なんだ、おめー」

礼一の太い眉が、怪訝そうに跳ね上がる。それじゃなくともイラついているのに、もっとも不愉快な『イケメンくん』というヤツだ。

「いやや、三対一なら加勢してもいいかなって思つて。俺、『うーうの見ると、ちょい血が騒ぐんだよね』

青年が、爽やかな笑顔を作る。

礼一が、ぱさつとカバンを地面の端に投げた。ボキボキと音を鳴らして威嚇する。

「昭成、誠、やるぞ」

「「え？」」

二人が同時に顔を見合せた。

「これで三対一だな。どうする?」こっちも一人減らしてやろうか?」

三対一と言つても、裕平なんか使い物にならない。

彼は、まだ壁にもたれかかったままぐつたりとしていて、生きているのか死んでいるのか、分からないくらい無反応だ。

事実上、三対一。

それでも、挑んでくるという事は、腕に自信がある証拠だった。

青年が一笑する。

嫌味っぽさはないが、あまりの好青年な雰囲気に礼一の苛立ちが頂点に達する。

「どうせ、そつちの部が悪くなつたら加勢するんでしょ? だつたら、始めから参加でOK」

礼一の顔が、ピクピクと引きつった。

「上等だな」

と、固く拳を握り締める。



歯ごたえのない祐平よりも、このいけ好かない男を三人で袋叩きにした方が楽しそうだ。

しかも、気取ったかなりムカつく顔をしている。

口調さえもカランに障った。

礼一は、祐平の時と同じように、こいつは生理的に嫌いだと直感する。

「お前ら、こいつを押さえとけ！」

命令をすると、昭成と誠が慣れたように青年の両側から迫った。拘束させて、人間サンドバック状態にする気だ。

ボキボキと指を鳴らしながら、礼一が不適な笑みを浮かべる。

「時代遅れのヒーロー気取ってんじゃねーよー。」  
昭成が右の腕を掴んだ。

「ホント。イマドキ、人助けとか流行らねーつづーの」  
誠が左の腕を掴む。

だが青年は余裕綽々の笑みを浮かべていた。  
薄く笑い、捕まれた腕を軽く左右に振る。

「うわ！」

「ぐづく」

昭成と誠が、同時に弾き飛ばされた。青年は、僅かな動作しかしていない。昭成と誠は、あまりの動きの早さに、地面で尻餅をつきながらボクランとしている。

まるで飛んできたハエを追い払うかのような動きだった。

「……『イツ、拳法がなんか習ってるのか？』

その顔を見ていた礼一でさえ、何が起ったのか見切れていなかった。

気がついた時には、昭成も誠も地面に座り込んでいるところオチだ。

だが、ここで引き下がるわけにもいかない。

礼一には、一年前までボクシングジムに通っていた経験もある。

「少しほどかるひでえ、『とだな

元々、強面の顔を更に引き締めてすくむ。

「行くぜえー！」

掛け声と共に、渾身の右ストレートを茶髪の青年に繰り出した。

「おひと」

青年は身を低くしてサラリと拳を避け、代わりに礼一の腹にドスンと重いパンチを入れる。  
礼一の巨体が、ぐらつとよろめき、その場でグニャリとへたり込んだ。

「……ヒ

喉の中のものを吐き出しあがめる。

やつとの戦いで堪え、歯をぎつぎつと食こじまつた。

「れ……礼一?!

誠が悲鳴に近い声を上げる。

昭成が、懐から小型のナイフを取り出した。

「いこなつてると座我するべーべー

細い眉と一重の目が、きつとつり上がる。

だが、青年は大して驚いた様子もない。

「ん？ 武器有りにすんの？ 僕はそれでも構わないけど？」

飄々とした態度に、昭成がキレた。

ナイフを突き出して突進する。

もちろん、殺そうとは思わない。

だが、少し傷でも付けて脅かしてやるつと想つただけだ。

いきがつていても、血を見るなり泣き出す者もいる。

自分達に喧嘩を売ったことを後悔せしめる。

そり、思つていた。

だが

、

ナイフを握る手を、ポンと上から叩かれる。

それだけで腕がジンジンとして、骨までやられたみたいに痛かった。

「……ふざけた野郎だと思って油断した。昭成、誠、出直すぞ」  
礼一が、腹を抱えながら間にシワを寄せせる。

さきほどの一戦で、勝負はついていた。

ムカつく相手だが、歴然とした腕の違いを感じる。

礼一は、昭成と誠の前で負けるわけにはいかなかつた。  
ぎりつと奥歯を噛み締めて立ち上がる。

「ふる……えてる?」

自分の体が、ぶるぶると小刻みに揺れていた。

得体の知れない、この青年に、例えようもない恐怖を抱いていた。

まともにやれば、殺されるかもしれない。

爽やかな笑顔の下に隠された狂気のようなものを感じる。

高校生同士の喧嘩が発展して殺し合いになるなんて、よくある話だ。正直、足が竦んで立っているのもやつとだった。

「昭成! 誠! 行くぞ!」

礼一が声を荒げる。

昭成は不服そうだったが、礼一の命令は絶対だ。

誠に肩を借りながら、礼一たち=不良グループが撤退していった。

「大丈夫? 立てるか?」

と、青年が手を伸ばす。

だが裕平は手を差し出すどころか、ありがとうと言わない。

口から血を垂れ流し、薄つすらと涙を浮かべた瞳で呆然と地面を見

ている。

茶髪の青年が腕を引っ込めて、フレームの曲がった眼鏡を拾つた。

「これ、お前の眼鏡だろ？壊れちゃつたな

「何これ……」

やつと、裕平がゆっくりと口を開いた。

「正義の味方だつて？」

裕平の瞳が濁んでいる。

一点の輝きも無い。

茶髪の青年は、痛ましそうに見下ろすだけだ。

「これで、あこつらが僕を許すと思つの？マジで迷惑なんだよ。これで明日から……僕はもっとイジメられる……」

裕平は、青年の顔をみよつともしない。  
壁に身を預けたままぐつたりとしている。

「お前は、それでいいのか？」

青年に問われて、裕平の中で何かが音を立てて切れた。

子犬のような瞳を見開き、髪の毛をかきむしる。

「いいわけねーだろ！！ 僕だつて嫌だよ！！ でも、仕方ねーじ  
やん！！ 僕は、あんたみたいに強くねーんだ！！！」

本当は嫌だ。

こんな世界、住みたくない。

イジメられたくない。

他の生徒みたいに、学校が楽しいと言つてみたい。

もう、止めたい。

止みたい。

止みたい。

本当は、誰かに助けて欲しい。

でも、誰も助けてなんかくれないんだ。

助けて欲しい。

助けて！

助けて！！

「助けて……、助けて……、助けて……、助けて……、助けてよ……」

「……」

呪いのように呴いた。

青年が、すっと壊れた眼鏡を裕平に手渡した。

「強さってのは腕力や権力じゃねえ。強くありたいって【心】なんじゃねーの？」

「【心】？ そんなもの……何の役にも立たないよ」

「俺は、そつは思わないね。弱さは自分の心の中にある。それが克服できなきや、ずっと弱いままだ」

「それって……」

やつと裕平が顔を上げた。

夕日に照らされた青年の顔を見上げる。

前髪の長い茶髪に、細身だが均整の取れたスタイル。一見、制服にも見える服装。

「まさか……」

目から眼球が零れ落ちそつなほど見開く。

派手な金糸で縁取られた詰襟、ジャラジャラと飾りの付いたジャケットにパンツスタイル。

まるで「スプレー」。

そして、その服装を裕平は良く知っている。

それは、最近、ネットゲームの中で獲得した【装備】にそつくりだった。

「まさか、まだ、分かんねーの？」

と、青年が二一イット両方の口角を吊り上げる。

裕平は、ふるふると首を振るだけだ。

「俺は霧江龍樹だよ」  
キリエ タツキ

「そ……そんねば、あるものか！」  
「僕をからかってるんだな  
？！」

「からかってねーよ。なぜか【世界のけい】かた  
だ」

それでも、まだ裕平は必死に首を振っていた。

「なら、これは夢だ！ どう考へても、こんな事、現実にあるわけ  
ないじゃないか！」

「だよなあ

と、龍樹が苦笑いを浮かべる。

「でも、まあ、これは現実なんだから仕方ねーだろ」

「……いや、きつと僕はさつき殴られて氣を失っているんだ。それから、後は全部夢で……もしくは、もう全部……夢なんだ……」

祐平が地面に額を付けて倒れこむ。

「ヤレヤレ。重症だな

と、龍樹は呆れ顔で祐平の体を起こした。

「とにかくさー。出てきちゃったもんは、仕方ねーだろ。つづ一事で、よろしくな【俺】

と、爽やかな笑顔を浮かべる。

「一体……どういう事なんだ?

何が起こったんだ?

と、裕平が頭の中でパニックを起します。

じつは、裕平と龍樹は十一月の夕暮れ。

【現実の世界】で出会った

。

## 第一話

祐平は、自宅に戻り自分の部屋に籠った。龍樹と名乗る青年も一緒だ。

兄の一弥は外出中で家にはいない。

パソコンを起動させ、椅子に腰掛ける。

頭にヘッドセットを装着し、ディスプレイの壁紙に置いてあるアイコンをダブルクリックした。

認証画面が表示され、画面が暗転する。

モニターいっぱいに現れたのは

「Electric World」によるセー

だ。

「まさか……」

祐平はマウスを握ったまま体が凍りついた。職別の五人のサンプルキャラクターが現れる。

「それでは、まず始めてキャラクターの名前と職業を決めて下さって

ゲームデータが空っぽだ。

何のキャラクターも作られていないことになっている。

キャラクターの新規作成画面から、田を離すことができない。

【霧谷龍樹】のゲームデータが、全部消えてしまっているのだ。

「う……嘘だ……嘘だ……」

ぶつぶつと呟く。

その祐平の横で、龍樹もモニターを覗き込んでいた。

「そりゃー、データだって消えてるっしょ。俺は、じつにいるんだから

「うわああああああああっーーー！」

奇声を上げながら、頭を搔き鳴らす。

祐平は、先ほど殴られた頬がどす黒くなつており、汚れた制服のままだつた。

「すげーショックなのは分かるけどよお。ちょい落ち着けや。つか、まず着替える。制服汚ねーし、傷の手当でもじるよ」

同じ人物とは思えないほど龍樹は冷静だ。  
だが祐平は頭が混乱して、気が狂いそうだった。

「なんて事だ！マジ、最悪だ！！お前、今すぐ、ゲームの中に戻れ！！」

自分よりも十センチ以上も背の高い龍樹に掴みかかる。

龍樹が子供を相手にするかのように、優しくポンポンと祐平の背中を叩いた。

「帰りたいのは山々だ。だが、戻る方法がわからねえ。気がついたら、突然、こっちの世界に来てたんだ。どうやって、こっちの世界に来たのかも分からんのだ」

「なんでだよ……そんな無茶苦茶。おかしいよ……」

祐平は涙声だ。

礼一に殴られても涙一つ流さなかつたのに、後から後から大粒の涙が頬を濡らしていく。

唯一の自分。

唯一の心の拠り所であつた世界が消失した。

それは祐平に取つて、現実の世界で死ぬよりも辛いことだった。

「とにかくだ、俺たちは元は一つの人間だ。俺も、お前も記憶を共

有している事になる

「記憶の共有?...」

「ああ。お前が【Electronic World】の世界で知っている事は俺も知ってるし、知らない事は俺知らない。同じく、この世界で記憶している事は知ってるし、お前が知らない事は知らない。見かけのキャラクターは違えど、中身は同じ人間だという事さ」

確かにそれは筋が通っている。

それでも、実感などまったく沸かない。

「恐らく、俺が、こいつの世界に出てきてからの記憶は共有されないと思うが、俺もこの世界の常識を知っているという事になる」

「だから、それがどうしたっていうんだ!」

祐平が苛立ち紛れに叫ぶ。

龍樹が、ヤレヤレと頭を撫でた。

祐平は、まるで大きな子供のようだ。

## 第一話

「俺はElectric World、つまり自分がいた世界がネットワークゲームだという事を理解しているし、操作しているのが祐平だと分かっている。おかしいのもね。でも、だからといってなぜこんなことになったのか理由は分からぬ。でもさ、こうなった以上、この現実は受け止めないといけないし、祐平だつて俺なんだ。少し冷静になつてくれよ」

龍樹が、幼い子供を諭すようにだめる。

龍樹は現実の世界を見たことはないが、祐平の記憶があるので混乱はしていない。

なるほどとは思うが、そんなの納得はできなかつた。しかも、目の前に突き出されて見ると、益々、これが自分で作ったものなのかと疑いたくなる。

基本的に祐平と性格は同じはずだ。しかし、それはゲームの中での性格。作られた人格である。

「さ、着替えようか。俺も、これからのことを考えなくちゃいけねーし

祐平の背中に大きな手が触れる。

それはまるで、本物の人間のように温かかった。

「大体さ、スキルの発動とかどうなんだよ。EWの世界は、空氣に電気が帯電していて、それを貯めてるんだぞ」

「ここには、パワーを充電してくれるトルーパーもない。当然だが、回復アイテムを売っている道具屋もない。」

「それが…… も、感じんだよね」

龍樹が、胡坐をかいて座る。

エレクトリックパワーとは、よくあるファンタジー系ゲームの「EP（マジックポイント）」に値するものだ。

スキルを使用する時は、このエレクトリックパワーが必要で、失われた「EP（エレクトリックパワー）」は座つて休憩することで充電可能であった。

もちろん、龍樹くらいのレベルになってしまつと、フル充電するのに一時間は必要だ。

暇な時は、そやつて貯めるのもいいが、大抵の場合は間に合わないので、トルーパーに充電してもらつたりアイテムで回復しながら狩りをする。

「感じるつて、まさか充電してるの?」

「ああ、そつみたいだ。タベ、EPがほとんど空のままログアウト

しただろ？」ひつひつに着てから座つてなかつたから、そんなに感じなかつたけど、今は結構溜まつてゐる」

EWの世界の設定は、戦争で荒廃した惑星だ。

核兵器に変わる光化学兵器の影響で、世界には高濃度の電気が帯電し、その空氣中に帶電している電気を使いナックルや銃などの武器を使用するところのことになつてゐる。

「んじや、装備やアイテムはどうなつてゐるの？」

汚れた制服からトレーナーとジーンズに着替えながら、龍樹の装備をじつと見た。

我ながらカッコいい改造学ランで、着ているだけで素早さや力、体力などのステータスがアップする。

「EWの世界と同じだな。倉庫に入れてあるやつは持つてねえが、普段、インベントリに入つている持ち物はそのまま残つてゐる。でも、この前のイベントで回復アイテムも結構使つちまつたし、ほとんど空だな」

それは、祐平にも容易く想像ができた。

大体、接続した時に足りないものを補充してから出かけているからだ。

「仕組みは分かつてきただけど、兄貴になんて説明しよ?……」

まさか、遊んでいるゲームのキャラクターが現実の世界に出てきてしまったなんて正直に言つわけにはいかない。

頭を抱えていると、龍樹にポンと肩を叩かれる。

「学校の友達でいいんじゃねーの？ 無理に、嘘つくと後々大変だぞ？」

「うん、そうだね……」

それでも十分に不振がられるとま思つが、この際だから仕方が無い。このまま龍樹を外に放り出すわけにもいかないし、離れるのはもつと不安だ。

「まあ、ジタバタしても始まらねえから、俺は、こっちの世界を堪能しながら戻る方法を探してみる」

「堪能つて……外をウロウロしたりまづいんじやないの？」

「そういうわけにもいかねーだろ。それに、こっちに現れてるのは俺だけじゃないかもしないしな」

「そ、それって……他にも現実の世界に出てきたキャラクターがいるってこと？！」

「いや、わかんねーけど、可能性はあるだろ」

龍樹の言つことはもつともだ。

もしかしたら、自分以外にも困り果てている人たちがいるかもしない。

「そついやあさ、俺、あまり祐平から離れられないみたいだ」

「え?...」

祐平が目を丸くする。

「さつき、家に帰つてくる時に感じたんだが、お前と離れられる距離はせいぜい十メートルだな。それ以上離れると体が勝手についていつちまうんだ」

つまりだ、と龍樹が祐平の目の前に人差し指をつき立てた。

「俺の可能な行動範囲は、祐平を中心に半径十メートルつてことだな」

「うげつ、そ、それは困るよ...」

自分が学校にいる時はどうするんだと、顔を歪めた。まさか一緒に授業を受けるわけにもいかない。

本当に、龍樹に関しての問題は山積だ。

どう見てもコスプレの変人にしか見えないし、おかしいくらいに綺麗な顔である。

元はCGなんだから当たり前だが、これはやり過ぎたと今更ながら反省をする。

しかも、本物の人間のように見えていて動いている。

質感もあるし、触れる。

そもそも、ゲームの中から出てきたということが異常なのだ。

【未来から来ました】と言われたほうが、よほど現実味がある。

P.i p.i p.i p.i . . . 。

突然、机の上の充電器に立てかけてあった携帯電話の着信音が鳴り響いた。

電話など、滅多にかかるこないので、びくつとする。

裕平は、表示されている名前を見て更に驚いた。

『入野一弥』

兄貴からだつた。

よほどの用事があるに違いない。

滅多に、兄から電話がかかってくのひとなどなかつた。

「 も、もしもし？」

不振感一杯に、オドオドと電話に出る。

『 裕平、俺、ちょっと新しいバイト初めて家に戻れないんだ』

「 も、そりなんだ」

『 しばりぐへ一人にさせてしまはげど、何があつたら連絡しなさい』

「 う、うん。分かった」

一体、何のバイトを始めたのか、どうして帰れないのか、どこにいるのか、いつ戻つてくるのか？

詳しい事は一切話さないし、裕平も聞かなかつた。

でも、とつあえず、これで慌てて龍樹という存在を隠さなくとも済む。

あまりのタイミングの良さだったが、兄の事がクリアされ安堵した。

『 じゃあ、切るから』

「 うん」

そつけない会話が終了し、再び充電器に立てかける。

「相変わらず、兄貴と上手くやつてないんだな」

と、龍樹に皮肉を言われた。

「……そんな事、十分知ってるでしょ。僕は、あの人、苦手なんだ」

恐らく、一弥も裕平が苦手だ。

本物の兄弟なのに、どうやつて扱つていいのか分からぬ。  
お互ひが、そんな感じだった。

「まあ、これで俺の存在も兄貴にバレないし、しばらくは安泰だな」  
「そうだね。やっぱり兄貴に上手く説明なんてできないしね」

きつと本当の事を言えば、バカにされる。  
二人揃つて、冗談を言つてはいるとしか思えないだろう。

いや、兄貴の事だ。

冗談として受け取つてもくれないかもしれない。

からかつて、何が面白いんだ?と軽蔑されて終わりかもしれない。

「なあ、まだ信じてねーの?」

「い、いや……そう言つんじゃないけど……」

と、一人で視線を向かい合わせる。

「どうしていいのか、分からぬんだ」

「俺だつて、なんで、じつちの世界に出てきたのか、ワケわからんねーし。どうしていいのかもわからんねーよ」

「だよね……」

龍樹が、「ロロロ」と絨毯に寝そべる。もう充電が終わつたらしい。

「まー、郷に入れば郷に従えつて言つし。逃げる場所もねえ、隠れる場所もねえ。お前も、そろそろ腹決めようぜ」

「そ、そんな事を言われてモ……」

「キヤ——————ツ——」

頭の中でグルグル悩んでいると、急に外が騒々しくなつた。

とこう黄色い悲鳴に、龍樹が飛び起きベランダに出る。

「なつ、なに? !」

この辺は、夜遅いと人通りが少なくなるので、時々痴漢や引っ立くりが出る。

当然、この悲鳴もその類の被害にあったのだろうと想像していた。

龍樹が、じつとマンションのベランダから下の道を見下ろす。

「あれは……」

祐平も後に続く。

この部屋はマンションの一階なので、下の道路がよく見えた。

「え？」

そして、その光景を見て、祐平の体が固まる。

「グルルルルルツルルルルルル」

低い唸り声が、風に乗って運ばれてきた。

「……犬？！」

半疑問系になってしまったのは、その姿が異様だったからだ。

まず、犬にしては体がメタリックに光っている。

それは、電柱についている外灯でも見て取れた。

そして、その瞳は真っ赤だつた。

充血しているなんて、生易しいものじゃない。

赤い、ライトのような輝きだ。

「いやああああっーー！」

悲鳴を上げているのは、スーツを着ている〇一風の女性だ。会社の帰りなのか、高級そうなバッグを胸元に抱えて、道の中央にへたり込んでいる。

「グワッ！」

黒い犬のようなものが、女性に向かつて飛び掛る。

「あぶねえーー！」

止めるよりも先に、龍樹が飛び降りた。

「ちよーーーーーーーー階なんだけどーーーー！」

「そんなものの関係ねーーーーーーーー！」

そう言えば、龍樹の手に武器が装着されていない。

タベは、【ドラゴンナックル】を付けたままログアウトしたはずだ。

「まさか……武器がないのか？！」

祐平の心配をよそに、龍樹は犬に蹴りかかっている。

「ギャン！」

黒い犬が悲鳴を上げて、後ろに下がった。

動きを止めて充電を開始する。

それは、EWに出てくるモンスターが、スキルを使う前触れだった。

当然、祐平は、これが何なのか知っている。

龍樹が女性を庇うように目の前に立ちはだかった。

「ここは危ないから、逃げる」

そつ言われても、女性は腰を抜かしたようで動けない。

「龍樹！ 武器は？！ 無いのか？！」

祐平がベランダから張り叫ぶ。

龍樹が、ベランダを見上げ、ふふっと笑みを零した。

「当然、あるぜ。おし。」**「いい、雑魚キャラ！」**【ドリゴンナックル】  
で叩きのめしてやる！

龍樹の両拳に、**「じつにナックルが装着された。**  
**エレクトリックパワーを武器に充電させる。**

「へ？」

祐平は、自分の体の変化に気づいた。

まるで、実態を失うかのようにフツと意識が途絶える。

龍樹の頭上に稻妻が下りた。

ドッカーン！ といつ雷鳴と共に体が黄金色の輝きに包まれる。

「う……嘘だろ……」

祐平が意識を取り戻した時、田の前に見えるのは自分に襲い掛かってくる黒い犬だった。

11

頭で考えるよりも、手が先に出る。

「スクリュー・アタック!!」

高レベルで取得する、ファイターのスキルだ。

黒い犬もスキルを使つていて、二つの力が衝突する。

花が爆ぜた。……………ン！ という衝撃音と共に、二つの火

黒い犬が地面に転がり、ぐつたりとする。

「キュン、キュン、キュン、

最後の断末魔と共に、動かなくなつた。

龍樹が一撃で倒したのだ。

「な……なに」「……」

龍樹が、自分の両手をじっと見下す。

正確に言つと、龍樹の体だが中身は祐平だ。

武器を装着した途端、彼の中に取り込まれてしまつたのだ。

【なるほどねえ。」「いつ仕組みなのか】

頭の中で、声がする。

まるで、耳打ちチャットをしてくるかのようだ。

「いつ仕組みつて?……

祐平は、まだ呆然としていた。

時間の経過と共に、黒い犬が点滅を始め消えていく。

【つまり、武器を装着すると祐平と合体しかまつたヒューマン】

「が……合体つて……」

傍から見れば、龍樹が独り言をブツブツ言つてゐるかのよつたな光景だ。

後方から視線を感じ、はつと振り向く。

「へ、うわ……、あの……」

祐平と同じく、女性もパニックを起こしてゐるらしい。

綺麗にセツトされたいたと思われる髪は乱れ、口をポカンと開けている。

「……夢だと思つて、早く家に帰るんだな

龍樹が良いそな台詞を吐くと、女性はポーッと頬を染めた。

「ゆ……夢つて、あ、あの……」

立てないみたいだったので、手を差し伸べた。

「どうだ？ 立てそつか？」

「は……は……」

いくら見かけが龍樹でも、こんな口調を女性にしたのは初めてだ。

差し出した手を握り返され、道路に立たせる。

「怪我はないか？」

と思わず聞いてしまった、女性は「クリクリと頷いた。

「な……無いです。大丈夫です」

思いつき、意識されているのが分かる。

祐平は、困りながら頭をガリガリかいた。

「これ、どうやって戻すの？」

【恐らく、武器を解除すると戻るとは思うが、この人の皿の前でや  
れねえだろ。さつさと逃げろよ】

そう言われても、未だに手を握られたまま離してもうれない。

「あ、あのー助けていただいて、どうもありがとうございました！」

ゲームの中なら何百回と聞いた台詞だ。

「じゃあ、俺はこれで」

「あ、あのー、お願ひします！助けて頂いたお礼をせせて下さい！」

そんなのいいから手を離してくれよと言いたい。

でも女性の目は、すっかりハートの形になつていて、さつきまでの恐怖なんかすっかり忘れてしまつたようだ。

黒い犬、あれはEWの世界にいる【メカ・ドッグ】だ。

龍樹が言つた通り雑魚キャラの部類で、スキル一発で倒せるレベルのモンスターである。

その、わけのわからない機械化犬に襲われたというのに、危ない目にあつたとか、倒した死体が消えたとか、そういう事実はどうでもいいみたいだつた。

「わつ、私、高沢沙希って言ひます。23歳、独身、会社の受付をしていて、せめてお名前、良かつたらメアド交換してもいいですか？」

「……」

めんどくさいなと、強引に手を離した。

「悪い。急いでるから」

「マンションに戻るわけにもいかないので、駅とは反対方向に突っ走る。」

その先には大きな公園があり、調度いいと中に入った。

公衆便所の裏に回り、辺りに人がいないのを確認してナックルを外す。

龍樹の予想通り、祐平の体が龍樹の体から離れた。

「……龍樹と合体している時は、走っても疲れないんだ」

変な所に関心をしてしまった。

普通なら、こんな距離を走ればハアハアと息が乱れているはずだ。

「体力は満タンだしなー。ゲージが減つたら、ハアハアゼイゼイだろ」

「なるほど……」

「しかし、これで、この世界に来たのが俺だけじゃないって証明されたな」

龍樹が腕を組んで便所の壁に寄りかかる。当然、祐平も同じ口トを考えていた。

EWのキャラクターだけでなく、モンスターも現れているのだ。

「当然、龍樹とメカ・ドックだけじゃないよね？」

「だろうな。他のヤツらも、この辺に出てきてると困ります」

本当に、この世界はどうなつてしまつたのだろうか。

次々と現れるゲームの世界の住人達。

この世界は狂つてしまつたのだろうか？

それとも自分の頭がおかしいのだろうか。

「とにかくせ、俺達は一心同体なんだ。これからもよろしく頼むな」

龍樹が右手を差し出す。

祐平はしづしづと握手を交わした。

「運命共同体 か。かつちよいしな、俺達」

「……龍樹って、そんなに能天氣だつたんだ」

「本来のお前も、じつじつ性格なんだぜ?」

そんな「」を言われても実感が沸かない。

それに、その性格は、容姿が良くて強くて仲間がいる龍樹だから振舞える態度なのだ。

「僕は……」

ぱっとしない見かけ。

勉強もスポーツもできないし、礼一たちのせいで友達もいない。

「あつと変わると。俺は、お前が望んだ本来の姿だ」

それは自分が自分に言い聞かせてくるようなものだった。

無理なのは分かっていても、龍樹に言わると不思議とそうなれる  
ような気がしてくる。

「ホント、能天氣」

苦笑いで返し、龍樹と肩を並べてマンションに帰る。

この時、もう世界の全てがおかしいことに、一人はまだ気づいていなかった。

祐平と龍樹の戦いは、始まつたばかりだ。

## 第一話

いつも通り目を覚ますと、ベッドの下では「ロロン」と龍樹が横になっていた。

ベッドで寝るなんて仕様がなかつたため、どうでもいいそつだ。龍樹も祐平が寝ている時は同じように寝てるみたいで、同時に目を覚ます。

就寝前は、もしかしたら全部が夢で朝起きたら龍樹はいないかもしないと思っていたのだが、やはり夢ではなかつたらしい。

もしくは、今も長い夢を見続けているのか？  
今が、現実だと判断する術を祐平は知らない。

祐平は居間のテレビを点けた。

あれから、家の近所で悲鳴は聞いていない。  
でも、もしも【Electric World】のモンスター やキラクターがどんどん現れていったとしたら、世界中がパニックになつていいはずだ。

「……全然、ニュースになつてないね」

画面に映っているのは、いつものニュースキャスターで、朝特有の清清しい笑顔を振りまきながら、今週の映画興行ランキングを発表していた。

バチバチとチャンネルを変える。

だが、どの番組もスポーツ関係やくだらない芸能人の「ゴシップニュースばかり流していて、EWに関係がありそうなニュースなどやっていない。

新聞は取っていないので分からぬが、パソコンで調べても、これといってモンスターが暴れているという記事は見当たらなかつた。

「まだ現れていなか、これから現れるのか……って、とにかく？」

「そりなのかな。でも、できればもう会いたくないや」

龍樹は食事を取らないので、一人だけトーストをかじり制服に着替える。

少し汚れていたが、クリーニングに出す時間もない。

「ねえ、学校にいる間、どうするの？」

「んー、考えたんだが、屋上にでも行つて隠れてるよ

確かに、授業中なら誰もこない。

しかも、真上なら十メートルの範囲内だ。

それでも、色々無理はある。

祐平は生身の体なのでトイレにだつて行くし、体育や化学などは教室を移動する。

その全部の移動に龍樹が合わせて動くなど不可能に近い。

「やつぱり……学校行くの止めようかな

学校の生徒達に龍樹を見られたら大問題だ。  
まったく説明が付かないし、EWをプレイしている人がいたら、それはそれでもっと問題だ。

「んじゃ、俺と巡回行かねえ？」

「巡回つて……」

龍樹は【Electric World】の世界で巡回好きだった。落ち着きがないと、よくギルドの連中に笑われたものだ。

「祐平だつて気になるだろ？ この世界がどうなつちまつたのか」

「そりゃー、気にはなるよ。でも、例え世界がおかしくなつても僕らに何ができるつていうのさ。もちろんメカ・ドッグ一匹くらいなら簡単に倒せるよ。でもレイドや高レベルのパーティ狩場モンスターが現れたらいくら龍樹でもソロじゃ無理だ」

祐平の言つことも一理はあつた。

龍樹も分かっている。

本当に、EWのモンスターが暴れだしたとしたら、一人ではどうすることもできない。

「せめてナスカでもいなかなー」

ナスカはこういう場合、一番頼りになりそうなギルメンだ。だが、プライベートの情報を一切公開していない祐平は、ナスカの年齢どころか、どこに住んでいるのも知らない。

他のメンバーは、携帯電話の番号やアドレスを交換したりしているらしいが、誰一人聞いていなかつた。

「とにかく、龍樹がEWの世界に戻ればいいんだ」

祐平がボソッと呟く。

一緒にいられるのも嬉しいが、変な気持ちだ。

それに、こんなことで悩むくらいなら、ネットゲームをやっていたかつた。

「世界がピンチの時にネットゲームねえ」

そのネットワークゲームのキャラのくせに龍樹の反応は冷ややかだ。

「仕方ないだろ！ 僕は、現実の世界が好きじゃないんだ」「だからって、いつまでも閉じこもっているわけにはいかないだろが！」

本当に……これは僕？ と龍樹を見上げる。

そりやあ、ゲームの中では人望あるリーダーとしてやってきた。面倒見もよく慕われていたが、ここまで自分が考えられるだらうかと疑問が出てくる。

まるで、もう別人格が中に入っているかのようだ。

## 第一話

「お前さあ、半年前の英雄戦、覚えてるか？」

龍樹に問われ、祐平は頷いた。

それは初めて龍樹が英雄になつた時の英雄バトルのことである。

それまで、ファイターの英雄は【時の風間】というキャラクターが君臨しており、向かうところ敵なしと言っていた。  
時の風間は、とにかくレベルが高く、装備がいい。  
いくら技術があつても超えられないくらい特出しており、ファイターをしてこる者はみな英雄になるのを諦めていた。

時の風間は、【ディジヨン】というギルドのギルドマスターだった。ディジヨンは戦争で城を獲得していく、領土に様々な圧力をかけていた。

税金の吊り上げから始まり、攻城戦に参加するギルドは敵対として戦争を仕掛けると脅し、気に入らないギルドを潰した。

横暴の限りを尽くしたディジヨンは、まさにElectric Worldの覇者だった。

だが、龍樹は諦めなかつた。

もっと住みよい、みんなが楽しく遊べる環境が欲しかつた。

ディジヨンの城を攻めると言い出すと、みんなから反対されたが、時の風間が持つていてる英雄スキルさえなくなれば落とせると思った。

そして、EW始まつて以来の下克上が始まる。

龍樹は、英雄戦で時の風間を倒した。

初めての英雄落ちに、ディジヨンの士氣は乱れた。  
ディジヨンが持つている城に攻め入れば、ギルドが潰れるまで粘着  
すると言われたが、時の風間はあっけなく引退した。

英雄のいなくなつたディジヨンは、防衛に失敗をする。

シトロン率いる攻軍はディジヨンから城を取り上げ、領土を平和に  
導いた。

龍樹が真の英雄視をされ始めたのは、この頃からだ。  
領土狙いではないと、あえて他のギルドに管理を任せ、自分達は自  
由気ままにEWの世界を楽しむ集団にする。

たちまちシトロンはEWの世界の有名ギルドとなり、龍樹は憧れの  
英雄となつていつた。

もちろんトラブルは耐えない。

まったく平和なゲームなど、面白みがないからだ。  
それを理解した上での正義と悪がある。

龍樹が目指したのが、たまたま正義だつただけだ。

人を助けるのは楽しかつた。  
感謝されるのが嬉しかつた。

現実の世界には、絶対にないものが、あそこにはあった。  
努力すれば、願えば、どんどん思いが叶つていつた。

「あの時の俺は、自分で言うのもなんだけど、カツ「良かつた。す  
げー、男前ジャンつて誇れた。だからさ祐平、お前がカツ「悪いこ  
と言つくなよ」

祐平が、嫌そうに田を細める。  
そんなものは奇麗事だ。

人助けなんて、所詮、ゲームの中だからできたこと。  
現実の世界で、そんなものを実行したらリスクが高すぎると。

それに、力もない。お金もない。権力もない。  
他の人間に抵抗して、対抗するだけのものが、自分には何もない。

「違う……」

と、祐平が、小さく呟いた。

「違う！　違う！　違う！　…」

叫びながら、龍樹の背中を押す。

「お前は、僕なんかじゃない！ 違う人間だ！ 僕じゃない！！」

「祐平……」

「僕は、弱い人間なんだ。これが僕なんだ。もう帰れ！ お前なんかゲームの中でいきがつてろ！！」

「……そっか

龍樹が泣くように笑つた。

触れていた場所の感覚が、すーっと消えていく。

「たつ……さ？……」

まるで幻のよつて龍樹の姿が消えていく。

そしてテレビを消すよつて、ぷつつひとつ何もなくなつた。

「嘘……だろ？！」

急いで自分の部屋に戻りパソコンを起動する。

ヘッドセットを装着し、【Electric World】を立ち

上げた。

{ Electric World エレクトリックワールド }

その後に続くのは、

「それでは、まず始めにキャラクターの名前と職業を決めてください」

床にぐつたりと膝を付く。

「は……ははっ……」

力なく笑いながら、ボロボロと涙を流した。

ゲームのキャラクターなんて、いくらでも作り直せる。

でも龍樹は一度と作れない。

そんな気がした。

学校に行つても、格段いつもと変わらない教室だった。

関口礼一が休んでいるせいで、むしろ和やかな空氣である。

昭成と誠は来ていたが、礼一がないと空氣のようなものだ。

彼ら一人が直接處めてくる事はなかつたので、裕平は久しぶりに平和な午前中を過ごせた。

クラスのみんなも、どこか碎けた表情になつてゐる。

休み時間は、笑い声さえ上がり、いつものしんとした感じは礼一のせいだったのかと思い知らされた。

一人いないだけで、ずい分と変わるものだ。

裕平は、昼休み、屋上に上がつて、のんびりとパンをかじつた。

あれは……一体、何だつたのだろうか。と考える。

龍樹は突然現れ、そして消えた。

ゲームの中に戻つたわけでもなく、忽然とどこの世界からもいなくなつてしまつたのだ。

自分が想像できるような状況じゃない。

でも、できるならゲームの世界で、もう一度龍樹になりたかった。

この世界に現れたE Wの住人は全て消えたのだろうか？

それとも龍樹だけ？

絵の具で書いたかのような見事なスカイブルーの空には、綿飴のよ

うなフワフワの雲が浮かんでいた。

もつすつかり冷たくなつた秋風が、びゅーっと頬を掠める。

「ん?」

祐平の足元に、くしゃっと縛つたクセの付いている花柄のハンカチが引っかかった。

お弁当を包んでいたものが、どこからか飛んできたようだ。

「す、すいません」

拾いにきたのは、ボブヘアの女生徒だ。

祐平も何度か見かけた事のある、隣のクラスの同級生で、はしゃぐタイプじゃない大人しそうな地味な女の子である。

名前は根岸 美寿々。

美寿々も一人でお弁当を食べていたのだろうかと、見上げる。手には小さなお弁当箱と、文庫本が握られていて、立ち上がった祐平よりも頭一つ背が低い。

「はい」

祐平は、ハンカチを取つて手渡した。

美寿々が、手を伸ばして受け取ろうとする。

コシン。という小さな衝撃と共に、床に置いておいたペットボトルが転がつた。

ほとんど減つていなかつた琥珀色の液体が、ドクドクと流れ出す。

「あ……」

美寿々が、慌ててペットボトルを拾い上げた。上履きの爪先で蹴つてしまつたのだ。

「い、いめんなさい。」

カフュオレは、もう半分くらい減っていた。

学校に来る時に、自動販売機で買ったものだった。

「気にしなくていいよ。こんな所に置いておいた僕も悪いから」  
イジメのような悪質なものではなく、どう見てもただの不注意だ。  
それに、自分でも何度も倒したことがある。

祐平はペットボトルを受け取り、キャップをした。

美寿々は「じうじょう」と戸惑いながら、俯いてしまつ。

「あ、そうだ。私、新しいの買つてくるから、そこで待つて下さい」

裕平は、体を反転させた美寿々を引き止めた。

「いや、本当にいいから。僕に話しかけてるの、他の人に見られたい方がいいし」

昭成や誠に見られたら礼一に報告される。

そうしたら、美寿々にも被害が及ぶかもしれない。

だが、美寿々は不思議そうな顔をしている。

裕平が礼二たちに虐められているのを知らないのだろう。

「僕に関わらないで」

できるだけ簡潔に、分かりやすく説明をしたつもりだった。でも、理解できていない様子で、哀しそうな顔をされる。

「本当に、『めんなさい』。私、ほんとに『ごめん』」

「いいから」

「でも、それじゃ『気が済まない』って『』」

普段、もっと悪質なイジメに会っている裕平に取っては、『コーヒーをこぼされたなんでも些細な出来事だつた。』

できれば自分と関わって欲しくないのに、美寿々は一步も引かない。

「やつぱり買つてきます」

裕平は諦めて、美寿々の背中を見送り教室に戻る。屋上にいなければ諦めてくれるだらうし、まかか自分の教室まではこないだらう。

そして、パンが入っていた空の袋と残り半分のペットボトルを持って立ち上がった時だつた。

細身でひょろりと背の高い体つきと小柄で太つた一つの影が裕平の目の前に落ちた。

「よう。こんな場所で、一人優雅にお食事か？」

昭成と誠が、裕平の目の前に立ちはだかる。

礼二がいないのに一人で絡んでくるのは珍しい。

だが、二人とも機嫌が悪いようで、態度や仕草からイライラしているのが分かった。

やはり大将がないと、本調子が出ないようだ。

「礼一から伝言。いつも通りに俺たちにジュースを買ってくる事。それと」

昭成が、キッと細い目を吊り上げた。

「昨日のふざけた茶髪野郎の居場所を教える。以上だ」

茶髪野郎。

明らかに、それは龍樹の事だ。

仲間を集めて報復でもする気なのだろうか？  
でも龍樹は、もう消えてしまっている。

例えいたとしても、不良仲間を何人集めたって勝てる相手ではない。

「あいつ、お前の知り合いなんだら？！」

何と答えればいいのか迷うが、偶然通りかかっただけだと呟つしかなかつた。

「黙つてたら、わかんねーんだよ！」

返事をする前に、昭成に左の頬を殴られた。

更に、誠に腹を蹴られる。

「ぐえい！」

裕平が口元に手を当てて床に這いつ。今、やつを食べたパンを戻しそうになつた。

「あやあつー。」

「ホールのペットボトルを抱えた美寿々が、小さな悲鳴を上げる。昭成と誠が一緒に振り向き、ぞつとした。

誠は、楽しそうに美寿々をマジマジと見てくる。

「おーおー、まさかお前、彼女できたんじゃねーよな?」

「ち……、違うー。その人は関係ないー。」

思い切り否定をしても無駄だった。

二人は、新しいおもちゃを『えられた子供のように口元を歪ませる。

「うつやー、礼ーに報告しないとなー。」

不適な笑みを浮かべる昭成をぎりっと睨む。

自分のせいで、美寿々が不良たちに絡まれるなんて、絶対に嫌だつた。

「だから、関係ないって言つてるだろーー。」

思わず、声を荒げてしまつ。

いつもと違つ強じ口調に、一瞬、昭成と誠がたじろいだ。

「お前、礼一がいないからって、俺たちにそんな態度とつていいと思つてんのか？」

昭成が祐平の胸倉を掴んだ。

また、殴られる。ヒ、思わず目を瞑る。

「止めてやれー。」

この光景を見て、泣き出すかと思ったのに、美寿々は負けじいなかつた。

大人しそうな顔をきりつと引き締め、昭成と誠を睨んでいる。

「なんだあ。やつぱり、彼女かあ？」

昭成がいやらしげに目つきで、ニタリと美寿々を流し見た。

「可愛い子の前で、情けない姿を晒してカワイイそうに、入野くそ」

誠が、手のひらにパンパンと拳を当てた。

パ――――――――。と弾けたような音が屋上に響く。同時に、昭成が「ぎやあっ」という悲鳴を上げて祐平を掴んでいた手を離した。

「どうした？ 昭成？」

誠が慌てて、昭成の顔を覗きこむ。

昭成は細い目に薄つすらと涙を浮かべながら右手を押えていた。

「痛つてえ。なんだこいつや

昭成の手の甲が腫れている。

思い切り何かで叩いたかのよつこ、真つ赤になつていた。

「てめえ、昭成に何やつた？！」

今度は誠に胸倉を捕まれた。

身に覚えのない祐平は、首を横に振ることしかできない。

「し……知らない。僕は何もしてない

誠が、祐平を殴りうと拳を振り上げる。

そのタイミングで、再びパーンという乾いた音が鳴り響く。

「……つたあ。くくくそー。なんのかうくりだ？！」

誠も手を離した。

痛みで、眉間に深い皺を寄せている。

「僕じゃない……僕じゃ……」

何かが弾けたような乾いた音。  
まるで……銃声だ。

祐平は、辺りに視線を巡らせた。  
さつきまでいた美寿々の姿がどこにもなかつた。

パーン！

音と共に、誠が床に倒れてのた打ち回る。

「ぐわあああ！」

放心状態だった昭成も周りをキヨロキヨロしている。

パーン！

「い、痛つてええええ！」

昭成が必死に背中を押さえている。

今度こそ、祐平は理解した。

誰かが、背中から狙い撃つたとしか思えない。

だが、何を？

誰が？

屋上には、一人のつめき声しか聞こえない。

背中につ一つと嫌な汗が滴り落ちた。

コンクリートでできた屋上の床に、小さな頭の影がぴょこんと飛び出す。

「ボク、 じつこの嫌いなんだよね」

その声は、鈴の音のような高くクールな響きだった。  
まだ変声期前の、幼い子供の声だ。

みんなが一斉に、声のする方向へと顔を向けた。

屋上に設置されている給水タンクの上に、小さな影が映っていた。

「う……子供？！」

昭成が半疑問系で語尾を上げる。  
まさしく子供だ。

だが、ここは高校の屋上である。

こんな、小学生のような小さな子供がいるはずがない。

それに 、あまりにも不振な容姿だ。

その子供は、ファンタジーの世界から抜け出してきたような衣装を着て、身の丈を越すほどの細身のライフルを抱えていた。

「な、なんだーこの子供！」<sup>ガキ</sup>

誠が、子供に向かつて指を指した。

「今のは、火力を最低にした通常攻撃。でもね、これ、少し火力を上げただけで人間の体くらい簡単に壊せるんだよね」

少年が無邪気な笑顔を浮かべる。

「どーせ空氣銃かなんかだろーが！ そんなオモチャで人撃つなんて、なんて危ねーガキだ。おしおきしないとな！」

昭成が、子供を引きづり降ろすと給水タンクの梯子によじ登った。

「子供だからって手加減しないぜ？ むしろ、もう一度とナマイキな事をしないように教育してやるからな」

子供相手に、ボキボキと指を鳴らす。

少年は怖がる様子もなく、薄つすらと笑っていた。

「あはは。教育されるのは、あんたの方でしょ」

そして、呆れ顔でヤレヤレと溜息を吐く。

「そんな無防備に梯子を登つてきて。それじゃあ、上から撃つて下をこと言つてるようなモンだよ、お兄さん」

皮肉たっぷりのセリフと共に、少年が昭成の額に銃口を突きつけた。

「てめーー撃つたら殺すからなー！」

「殺す？ あはは。いいね、最高。ボクを殺してみなよ。でも、その前に……」

子供の表情が一変する。

今までの無邪気な笑顔が消え、禍々しい笑いを浮かべた。

「ボクが、殺しちゃうかもよ。」

「ぐつ……」

子供のくせに、ぞつとする顔だ。

圧倒されて、昭成が梯子から慌てて飛び降りた。

「誠、このガキヤバイよ。目がイツてる」

「クソガキが！お前、そんなモン持つてるからつていい氣になつてんじやねーぞ……」

誠は、まだ威勢が良い。  
だが昭成は震えていた。

「ま、誠、コイツに関わらない方がいい。コイツ、頭おかしいんだよ」

裕平は、呆然と子供を見上げている。

逆立つた緑色の髪に琥珀色の瞳、小人のように小さい体、口調、声。

どれを取つても 、

「まさか【ランチヨム】なのか？」

子供の動きが止まつた。

視線を、昭成から裕平へと移す。

「どうして、ボクの名前を……」

やはりそうだ。

あの黒い上下の衣装はスナイパーの最強装備。  
そして、子供が抱える銃は【流星銃】だ。

「止める、ランチョム。それ以上争つたら、本当に、この人間が死ぬぞ？！」

祐平が涙声で叫ぶ。

「ちつ。なんだかよくわからぬーが。誠、行こうぜ」

昭成が誠の肩を掴んだ。

「マジ、こいつら気持ち悪い！」

そう言い残して、昭成と誠が階段を下りていく。

## 第六話

ランチョムが、給水タンクから飛び降りた。

三メートルはある高低差をものともせず、ひらりと見事な着地だ。

見蕩れていると、バツチリ目が合づ。祐平は、急に恥ずかしくなり俯いた。

「ボクのことを知ってるってことは、君も【Electric Wind】をやってるんだね」

ランチョムに問われ、祐平が深く頷く。

「しかも、ボクが現れてもさほど驚いてないってことは、自分のキャラクターも現実の世界に現れた。そうだよね？」

見かけは子供だが、口調は大人びていた。

ゲーム内では話したこともなかつたので、意外だった。もともと、スナイパーは五つの職の中でも、もっとも操作が難しいと言われている。

そして、ランチョムはそのスナイパーの頂点、冷静な判断と正確な射撃の腕を持つている英雄だ。

「昨日……突然、目の前に現れたんだ。でも、今朝、いきなり消えちゃつて」

「消えた？」

「ランチョ ムが、細い眉を吊り上げる。

「ボクのキャラクター、どうなったんだろ？　君なら何か分かるんじゃない？」

「ふむ」

ランチョ ムが、小さな手で顎を摩つた。

「どうなんだろ？　ボクは、ずっとこの世界にこもって、何分、こいつなつた原因も分からない」

「やっぱ、そりゃんだ

祐平が、がつくんと肩を落とす。

「消える前に、何かきっかけみたいのは無かったの？　HPが空っぽになつたとか、死亡フラグが出たとか」

「ううん

と祐平が首を横に振る。

「喧嘩したくらい

「喧嘩？　自分と喧嘩したの？」

「だつて……、あいつ、凄い偉そな」と囁つんだ。説教みたいの  
されたから、ゲームの世界に戻れつていいながら背中を押して……  
そうしたら、すーと消えた」

消え入りそうな声で呟く。

他に、思い当たることはなかつた。

でも、喧嘩が原因で消えるなんていうのも変な話である。

「なるほどね」

ランチヨームが小さな溜息を吐く。

呆れたように祐平を見上げ、さつと銃の装着を外した。

小さな子供の体と、少女の体が重なつたように見える。  
そして、それはあつといつ間に分離していく。

「う……そ……」

現れたのは根岸美寿々だ。

祐平が、口をあんぐりさせながら硬直する。

「もしかしたら、自分で自分を否定したから消えたのかも」

美寿々の意見にランチヨームが頷いた。

「相当ショックだつね。ボクだつて、美寿々に否定されたりやつてらんないよ」

「あ……あつあ……ああ……」

ランチョムがガリガリと頭をかいた。

「あれ？ そんなにショックだった？」

祐平は、てっきり大人の男の人が操作しているのだとばかり思っていた。

まさか、美寿々だなんて、龍樹が現れた時よりも驚きだ。

「まあ、自分と違う性別でキャラを作るなんて、よくあることじよ。もしかして、入野君もやつちやつた感じ？」

「い……いや、僕は男……だけど……」

「そつか。うちのギルドに、すい乳の色っぽいお姉さんのキャラクターがいるんだけど、その人中身は30過ぎのおじさんなんだよね」

「あ、あの……せ、根岸さんが学校にいる間、ランチョムはずつと屋上にいたの？」

「いやいや、スナイパーは【光学迷彩】ってスキルがあるから、それを使ってずっと一緒に行動してる」

なるほど、と思い出す。

光学迷彩というのは、カメレオンのように周囲の色や模様に応じて体表の色彩を変化されるというスキルだ。

レベルが低いと動いただけでスキルが解除されてしまうし短時間で元に戻ってしまうが、ランチョムならかなりの長時間【潜伏】する

」ことができる。

「それにしても、大変なことになりましたね」

美寿々が、不安そうにボブヘアを揺らす。

祐平も、同じ心境だ。

「ランチョム以外にもEWの住人が現れているとすると、私、一人での妄想でも幻影でもなさそうだし」

「僕だつて、自分の頭がおかしくなつたんだと思つてた」

「だよねえ、ボクだつて未だに信じられないよ。まさか現実の世界で、人間を撃つことになるとは思わなかつた」

「あ……」

何かを思い出したように、祐平がランチョムに顔を向ける。

「そうだ。助けてもらつて、言つのもなんだけど、人間に向けて撃つたらダメだよ」

「あれは、ちょっと脅しただけ。ボクは弱いものイジメが嫌いなんだ」

「そりゃー、イジメはきついし、僕だつて反撃したいけど。でも……」

……

美寿々がポンと祐平の肩を叩いた。

「入野君の言いたい」とは分かります。ランチヨムと同化した時、私の意志で止めることもできたのに、なんだか変なスイッチ入っちゃって。「めんなさー」

「いや、根岸さんは悪くないんだけど……」

女の子に助けられたというだけでもバツが悪いのに、こんなのが言えた義理じゃないかと頬を押された。

口の中に血の味が広がっている。

昨日と同じところを殴られたので、また同じ所を切ったみたいだ。

「あの、その傷、手当てしましょうか?」

頬を押された手に触れられ、びくっと体を強張らせた。  
現実で、こんなに近くで女の子を見たのは久しぶりだった。

「あ、ごめんなさい。痛かった?」

美寿々が、慌てて手を引っ込める。

「う、ううん、平気。それに、これくらい慣れてるし」

「ボク、クラスが違うから知らなかつたけど、あいつらいつもあるなの?」

「いつもは、もう一人。ボスみたいな人がいる。今日は学校休んでるからいいけど」

「あー……もしかして、関口君?」

そう言つたのは美寿々だ。

「うん」

「彼、小学校までは普通の男の子だったのに。なんで不良になつちやつたのかな」

美寿々の眩きに、そんなのいつちが知りたいよと言つたかった。

関口礼一のせいで、祐平の高校生活は最悪だ。

「あれ？」

ランチョームが、空を見上げる。

祐平と美寿々もつらうて上を見上げた。

「なつ……」

祐平が絶句する。

まるで、天井が壊れたかのように巨大な黒い渦ができていた。

轟々と音を立てて大地が震える。

太陽は厚い雲に隠れ、突風が吹き荒れた。

「うわっ」

「きやああっ」

小さな美寿々の体が、ふわりと浮く。

「根岸さん……」

祐平は思わず吹き飛ばされそうになつた美寿々の手を握り、給水塔の裏まで何とか避難した。

「まさか……」

ランチョームが、琥珀色の目を見開く。

黒い渦から、巨大な月が現れた。

真ん中には大きな瞳が一つ、地上を見下ろすかのように輝いている。

「イーヴィルアイだ」

祐平が、呟く。

美寿々も、ぽかんと空を見上げていた。

真つ青な空が紫色に変化していく。

明るかつた地上が、薄暗くなつていった。

「これじゃ、まるで……」

『ElectricticWorld』の世界、そのものだ。  
イーヴィルアイの登場と共に太陽が消える。

風は止んだが、空氣まで震えている気がした。  
底づように抱えていた美寿々が、ガクガクと震えだす。

遠くで、モンスターの鳴き声が響いた。

狩場でよく見かける、鳥タイプの機械化モンスターの声だ。

「入野君、これ夢だよね？ こんなのおかしいよ！ 現実とゲーム  
の世界がじつちゃになるなんて。こんなの！」

龍樹が現れた時点から、とつてこの世界はおかしい。  
美寿々にとつてもそうだ。

ランチヨムが現れた時から、既におかしかつたのだ。  
それでも、美寿々の動搖は止まらなかつた。  
ぎゅっと抱きつかれ、祐平も背中に腕を回す。

「EJのままじや、私たち、死んじやう」

「死ぬ？」

「だつて、そうでしょう？ 作ったキャラクターなら生き延びられるかもしれないけど、私たちは普通の人間なんだよ？ 武器も装備も無いし、スキルだつて使えない。雑魚モンスターにだつて、襲われば殺される」

美寿々の言つ通りだ。

世界がE Wになつても、自分達は普通の人間だ。  
特殊な能力もなく、無力な人間だ。

「じつすればいいの？じつすれば……」

裕平は、美寿々のように考へる事もできなかつた。  
ただ、果然と紫色に染まつた不可解な空を見上げている。

「美寿々、いつまでも泣いていられないよ。メカ・バードがきた。  
武器を装着するよ」

ランチョームが流星銃を装着する。

美寿々の体が、すーと着え、ランチョームと同化した。

「そ'だね。泣いてなんかいられない。入野君は、そこにいてね」

すっかり美寿々の口調になつたランチョームが、空からやつてくる鳥型のモンスターに狙いを定めた。

「ゴールドブリット！」

長い銃口から弾丸が発射され、機械化されたモンスターの体を打ち抜く。

撃たれたメカ・バードは凍りつき、屋上にドカンと落ちた。

「ひつ……」

祐平が小さな悲鳴を上げる。

あまりのリアリティに、体が震え上がった。

「ダブルブリット！ レーザーバレット！」

スキル一発でメカ・バードが壊れていく。  
だが、このモンスターはグループ型といって集団で行動をするモンスターだ。

いくらランチョムが高レベルでも、遠距離型のスナイパーでは群がれると死ぬ危険性があった。

でも、回避策はあった。

メカ・バードは高い所にいる敵は襲うが、地面に立っている時は襲わない。

ランチョムなら、屋上から地上に飛び降りても生き延びれるだろ？

「逃げて！」

と、祐平が叫ぶ。

でもランチョムは、下降してくる敵を一匹づつ倒している。

逃げられないんじゃない。

僕がいるから、逃げれないんだ……。

「大丈夫。第一集団がきたらヤバいけど、こいつらはEP<sup>エネルギー</sup>が持ちそうだ」

その第一集団が、イーヴィルアイの後方から飛んでくるのが見えた。

「くそー！」

と、祐平が地面を叩く。

こんな時に龍樹がいれば。

龍樹がいれば、こんな雑魚、いとも簡単に倒せるのに！

「龍樹！ 龍樹いるんだろ！ 力を貸せ！ 貸してくれ……！」

大空に向かって、喉が裂けそくなくらい叫んだ。

「もう、帰れなんて言わない！ 説教もきく！ だから、お願ひだ  
！ 助けてくれ……！」

「……龍樹？」

メカ・バードの集団がランチョムに気づく。まだ、最初の群れを倒しきらないうちに、七体もの機械化モンスターが下降を始めた。

二二

ランチヨムが、後退しながらモンスターを倒していく。  
引き狩りをするにも、場所が狭すぎた。

隠れるところもなく、本来のスナイパーの能力が発揮できない。

「ランチヨムー！」

「サンダートライク！」

祐平が叫ぶ声と同時に、視界がスパークした。

無数の稻妻が飛び散り、下降してきたメカ・バードの集団を襲った。

「」「」「」「」

叫び声を上げて、一斉にヘイトの矛先を変える。

「……なつ」

祐平は、まだチカチカする瞳を開けた。

サンダーストライクは、ファイターの範囲攻撃スキルだ。威力は小さいが、ヘイトを集める時に使用したりする。その、スキルで集められたメカ・バードが、どんどん殴り倒されていく。

「うつし。全部撃退ましたあ。つか、お待たせですう~」

祐平も、ランチョムも呆然とその姿を見ていた。

長身に茶色の髪。

切れ長のブラウンの瞳に、改造したガクラン。

見かけは龍樹とそっくりだ。

しかも、腕にはドラゴンナックルを装着している。

だが、そのキャラクターがあまりにも違った。

祐平は同化していないし、口調がおかしい。

「龍……樹？」

祐平が半疑問系で問いかける。

「あ~、うんうん、そう。これ、龍樹の体」

「ど、どういふこと?~!」

祐平は、給水塔の影から飛び出して龍樹に詰め寄った。現れたのはいいが、大分、様子がおかしくなっている。

「ちょーっと借りてたんですよ。『みんなさい』

龍樹が武器を外す。

青年の体と、女性の体が重なつた。

「あなたが、龍樹の中身?...」

間抜けな声を上げたのは、ランチョームだ。

「各地にレイドモンスターが沸いたんだよお。で、この体  
だと不便だから龍樹の体を借りたんですよ」

顔は可愛いが、どう見てもアニメで出てくるメイドの姿だ。  
しかも、長い髪はお下げで眼鏡をかけている。  
そして、どこに視線を合わせていのつか分からぬほど巨乳で、ス  
カートが短かつた。

絶対領域の下は、スラリとした足が伸びている。

「だ……誰?」

祐平がぽかんとしながら、少女を見る。

少女は、言い難そうに頬をピンク色に染めていた。

「んーと、私は、この世界の【管理者】の一部なんですよ。あなた  
たちのパソコンにウイルス撃退ソフトが入ってるでしょう?、イメ  
ージ的には、そんな感じなんですよ」

「そんな感じじゃ、全然分からなによ」

「でも他に例えようがないんですね。ウイルス駆除システムの末端だから。んで、この性格と服装は、開発者の趣味つてことでよろしくですぅ～」

「「「……」「」」

ランチヨムも龍樹も黙つたままだ。

祐平は、まだ啞然としながら少女の説明を聞いている。

「んー、困りましたねえ。私は、ただのウイルス駆除システムなので、滅多なことは言えないんですけどお、ちょーっと説明をすると、今、この世界は壊れかけちゃってるんですね」

「ど……どうして？」

「外部からハックされて、悪質なウイルスを流れちゃったんですね。で、駆除システムである私が動いて、ウイルスを撃退しているんですけどお。同時に、この世界に住む人たちを守らないとえらいこっちゃでえ」

「……」めん。よく意味が分からぬいや

祐平が頭を抱える。

パソコンがウイルスに感染するといふのなら、分かるが世界がウイルスに感染したと言われてもピンとこない。

「ですよね。肝心の部分をはし折っちゃうと、意味分かりません

よねえ「

少女がテヘッと笑った。

なんの緊張感もない態度に、頭痛がしてくる。

「あ、今、【ジリオン】から回答が来ました。入野祐平、根岸美寿々の「名にレベルHまでの情報を開示していいそうです。許可は下りましたが、これから私が説明することは、この世界の国家機密に値するものなので他言無用でお願いしますねえ。うつかりしゃべっちゃうと、しゃべった本人はおうか聞いた人も存在を抹消されます」

少女が物騒な話をしれっと話し出す。

それは、とんでもない、世界の真実だった。

## 第一話

関口礼一は、駅から学校までの道のりをダラダラと歩いていた。

昨日、龍樹に殴られた腹が、まだ痛い。  
もしかしたら、あばらにひびが入っているのかもしれない、敵つい顔を歪めた。

頭の中がモヤモヤする。

イライラし過ぎて、気が狂いそうだ。

「くそつ。あいつのせいだ」

と、吐き捨てながら落ちていた空き缶を蹴り飛ばす。

近くを歩いていた主婦らしき人が、一瞬体をびくつと礼一に向いたが視線を外した。

昨日、礼一は祐平を苛めている最中、突然、現れた男に負けた。改造したふざけた制服をきた、全てが気に食わない男だった。

結局、どこの学校か、学生なのかも分からぬ。

ただの氣味の悪いコスプレオタクたと思っていたのに、とんだパンチだつた。

もう昼の時間はとっくに過ぎていて、今から登校しても最後の授業しか受けれない。

だが、目的は勉強するためではなく、祐平を呼び出すためだつた。

もう一度、あの男に会つて、今度はこつちが先制を仕掛ければいい。ポケットの中には、凶器ナックルダスターを忍ばせており、あの男が現れたら使うつもりである。

いくら喧嘩慣れしても、最初の一撃で大ダメージを『えれば、そ  
うそう負けない。

とにかく、卑怯な手を使ってでも、何をしてもあの男に勝ちたい。  
地面にひれ伏した姿を見たい。

そうしなければ、この手が止まらない。と、震える右手を見つめる。

昨日から、ずっと止まらない。

この恐怖が、どこからくるのか分からない。

ただの恐怖とも思えない。

もっと根底の、自分でも気がつけない更に奥から湧き上がってくる  
感情だ。

目の前に影が落ちた。

ジロリと二白眼を光らせながら、足を止める。

礼一の前に立ちはだかったのは、頭のイカレた格好をしている男だ  
った。

「なんだ、テメエ」

目を細めて威嚇する。

「俺？ 俺は、正義の味方」

立ち上がったブルーの髪に緑色の相貌、黒いジャケットに真っ赤な  
革のパンツを着込み、派手にジャラジャラとチエーンの飾りを付け  
た派手な格好の男だ。

そして、非常識にも男は手にチューインガムを持っています。

男がニイツヒロ元を歪めた。

「関口礼一くん、噂では聞いているよ。高校でも、やんちゃしてるんだってな。いいなー。こんなにバカでも高校生になれるんだから。俺はお前のせいだーノトだけどな」

「何、言つてんだテメー」

「覚えてないの？ 忘れちゃつたあ？ あんたが毎日イジメてくれたおかげで、登校拒否して高校にもいけなかつた哀れな子羊ちゃんだよ」

中学の時、礼一が粘着をして苛めていたクラスメイトの顔を思い出す。

きつかけは、些細なことだつた。

自分が好きだつた女の子と付き合いだした、柔道部の同級生だ。

そいつは中学生のくせに大人びていて生意氣で、やたらと喧嘩が強く粹がつていた。

だから、礼一はボクシングジムにまで通い、体を鍛えて、そいつをボコつた。

不良仲間なんて簡単に作れた。

もてましていた小遣いで振舞えば、何人でも集まつてくる。

不良グループに絡まるようになつたそいつは、登校拒否になり、家に引きこもつた。

礼一が始めて、田の前からいなくなればいいと思つた男だつた。

高校に入学して、もつと田舎りな祐平が現れてからは、すっかり存在も忘れていたが。

「お前……荒垣アラガキなのか？」

自分で言つておいて戸惑う。

いくら一年近く会わなかつたとはい、まったく異なる姿だ。こんなに急激に成長するわけもないし、面影だつて微塵も無い。もともと体格はいい方だったが、今は度を越えている。

ボディービルダーのようにせり上がつた筋肉、射抜かれそうな凶暴な目つき、野太い声。

どれをとっても荒垣アラガキには見えないが、男は楽しそうに顔を綻ばせていた。

「うは。覚えていてくれたんだ。嬉しいよ。それでこそ、倒す樂しみがあるってえもんだ」

何が起つたのだろう。

理由は分からぬが、この男の持つているチョーンソーはただの飾りには見えない。

だが、こんなものを往々振り回すなんて狂つてこむらしか思えなかつた。

ポケットの中のナックルダスターを上から触つて確認する。こんなものが役に立つとも思えないが、素手よりはマシだ。

「さあ、そろそろ始めましょうか。一思いじゃ楽しめないので、腕一本からじますね」

ギュイーンといつ凶悪な騒動音と共に、チョーンソーが動き出す。

礼一は、全身べつとりとした嫌な汗をかきながら、立ち去った。

「や……止める。」

「なんもの、どう考えたって太刀打ちできない。」

「ふふ。それ、俺がよく言つてたよね。止める。止めてくれって。でも、君は泣くともつと楽しそうに殴つてきただけ」

完全に目がおかしい。

本当に、狂っているみたいだ。

これは狂人の目だ。

「い……嫌だあああ！ やつ、やめてくれ！ 殺さないで……！」

自然に礼一の膝が、がくつと落ちた。

四つんばいになり、地面に額を擦り付ける。

今まで、自分が苛めてきた奴らが取つていたポーズだ。

もちろん、要も、こうやって許しを懇願したことがある。

錯乱した礼一を見下ろし、男は楽しそうにチーンソーを構えた。

「いいねえ。ゾクゾクするよ。今まで、ずっと君に復讐したかったんだ。動画に撮りたいけど、無理だから心のカメラに収めておくよ」

「いっなら、本当に人を殺す。」

見かけはまったく異なるが、昨日会った改造ガクランの男に、ビコ  
か似ている。

簡単に、人など殺せそうな雰囲気。

ああ、そうか。

これが震えの原因か。と、礼一は気づいた。

男の緑色の瞳が、ギラギラと光る。

「バーストスクリューーーー！」

刃から炎が噴き出した。

大きな弧を描き、振り上げながら礼一に飛び掛つてくる。

その苦痛の声が聞こえてきたのは、礼一が蹲つた前方だ。  
そして次に訪れるはずの衝撃がこない。

礼一は恐る恐る田を開け、視界に広がる光景を見て目を疑つた。

「くつ……龍樹さん……なんで？」

そう呟いたのは、チョーンソーを持つてゐる男だ。

その【なんで】は、なんで止めるのかというなんど、なんでここにいるのかの両方の意味合いでいた。

龍樹の放つたスピード・パンチでバーストスクリューはキャンセルされ、代わりに男の顔に龍樹の拳がめり込んでいる。

「【血の契約】みてーな、ショボイことやつてんじやねーよ」

青い髪の男が、後方に吹つ飛んだ。

どーんという地響きを立てて、田舎が仰向けになる。

「すみません。俺……本当はコイツを襲おうなんて思つてなかつたんです。でも姿を見たらじつは暴走しちゃつて……」

男が、起き上がつた。

だがさほどまでの鬼気が、まったく感じ取れない。

厳つい大男が、借りてきた猫のように大人しくなつてゐる。

「ああ、わかるよ。合体するとやけにハイテンションになるよな」

龍樹が爽やかな笑顔でハハッと笑う。

「でも、それと人殺しは別だ。お前だって生身の体がそん中入つて  
んだろう？」

「は……はい」

「俺たちの敵はモンスターだ。人間じゃねえ。人手が足りねーんだ。  
お前もわっせと手伝え」

「手伝うつて……あの、今更なんですけど、これってどういうこと  
なんでしょう？ 昼過ぎに空がおかしいって気づいたら、突然ヒリ  
ヒリが現れて俺、パニくつちゃって……気が付いたら同化したまま町  
をうろついてちゃついたんです」

「あー、うん。そうだな。そこの質問は、この巨乳に聞いてくれ

「……巨乳？」

龍樹の後ろから現れたのは、メイドの格好をした奇妙な女の子だ。

「ちょっとあ、巨乳つて呼ぶのやめてくれませんかあ？ 私、一応、  
開発コードで呼んでくれって言つたじやないですかあ」

「……悪い。あんまり長つたらしいので覚えらんねー」

女の子がブンスカと怒る。

「じゃあいこですよ。頭文字をとつてKちゃんケイとでも呼んで下せー」

ケイが眼鏡をくいつと正しながら、じっこに笑顔を向ける。

じっこは、間抜けな顔をしたままポカンとケイを見つめていた。

「私は、この世界の掃除屋なん『ース。ちょーと不都合な事故が起きまして、ゲームの世界と現実の世界が『ぢぢや』になつてしますけど、そいら辺は気にしないで下をへーーー」

「気にするなつて……無理でしょ」

と、じっこは苦笑いだ。

「えつとお、この先の高校を【ヤーブポイント】にしました。じこっさんなら、その意味、分かりますよね？」

「ダンジョンの中に作る、仮りの安全地帯？」

ケイが嬉しそうに中指を立てた。

「やうそーーー 安全地帯です。その中にはモンスターが入つてこられなにように全力で守つてますので、じこっさんも一般人の方々を誘導してあげてください」

龍樹が、じっこの肩にポンと手を置く。

「つて、ことだ。まあ、詳しい話しさは後つづーーと。とつあえず、俺はできるだけ仲間と合流していってやるやん！」

「合流つて……まだ他にもいるの？」

「ケイの話しだと、ランダムに出現してくるらしい。ちなみにおかしいのは△区周辺だけだ」

「んじゃ……世界が全部おかしいわけじゃないんだ」

「今んとこはな。でも、もしかしたら広がる可能性はある。今、全國に散らばったコーナーをケイの仲間が集めている。高レベルで力になりそうなヤツららしい」

「……分かったよ」

龍樹が、ぐるりと後ろを振り返った。

そこには、まだ地面に蹲つたままの礼一がいる。

「あんたも生き延びたいなら避難しな」

礼一がぐしゃぐしゃになつた顔で龍樹を見上げる。

「なぜ……俺を助けた」

ロローが悔しそうに拳を握つた。

「仲間が人間に手をかけるのを見過ごすわけにはいかないだろ。でもね、誤解すんなよ。俺は、あんたが勝手に野垂れ死にすんのは構わないんだ」

三人が視界の先に消えていく。

礼一は蹲つたまま、しばらくその場から動けなかつた。

S区は、完全に現実の世界から孤立していた。一画面が切り取られるように、【現実】として成立していなかつた。処理を行つたのは、この世界を管理するマスター・コンピュータ【ジリオン】だ。

ジリオンは【Electric World】と融合してしまつた【現実】の世界を、隔離したのである。

どうして、そんなことができたのか？

その理由は、祐平たちの住む世界。

そこもまた、コンピュータが作り出した仮想空間だつたからだ。

地球は氷河期を迎えていた。

ケイに、そう説明をされた時、祐平は何のことだかわっぱり分からなかつた。

美寿々も同様、ポカんとしたままだつた。

氷河期が訪れた原因は、地球規模の核戦争だ。

爆発によつて巻き上げられた灰や微粒子により、日光が遮られたためである。

地上は、放射能を帶びた死の灰が蔓延し、とても生物が住める環境ではなくなつてしまつた。

だが戦争で生き残つた僅かな人類は、諦めずに地下凍結の施設を作つた。

人類は、生きながら地下で眠っているのである。

そして、生命の誕生から【夢】までをコンピュータが管理している。【現実】は、みんなが見ている共通の夢であり、凍結したまま延命させる処理の一つだ。

そして、事件は起こった。

【Electric World】の管理サーバーに侵入してきたハッカーが、【ジリオン】のファイヤーウォールまで突き破つてしまつたのだ。

結果、一つの仮想空間は混合し、まともではない空間を作り出した。住人にとっては異世界だが、どちらも真実の世界ではなかつたのである。

現在、ジリオンは、フル稼働でプログラミングの修復作業をしている。

だが、厄介なのは、この一連の事件で命を落としたものを再生することができないということだ。

ゲームの中では簡単な【死】が訪れる。それは蘇生の呪文やアイテムで復活させることのできる【偽りの死】だ。

だが、現実の世界と融合してしまつた今、蘇生の呪文やアイテムでの復活は不可能だつた。

HPが0になつてしまえば、人間でもキャラクターでも死が公平に訪れてしまうのだ。

「だから、死なないように気をつけてくださいねえ」

ケイに言われ、龍樹もランチヨムも身を引き締めた。この世界に回復アイテムを売る道具屋はないし、まだ回復をしてくれるトルーパーも見つからない。死んだら、本物の死がやってくる。

それは彼らに取つて、非常に過酷な宣告だつた。

「……くつそお。処理しても、全然追いつかないですねえ」

湧き出したモンスターの群れを見て、弱音を吐いたのはじりだ。避難してくる住人たちを襲わないように、学校の周りのモンスターを駆除しているがキリがない。

ケイの話によると、S区に住む半分近くの住人はモンスターに襲われ命を落としているとのことだった。

EWのキャラクターと融合した者ならモンスターに襲われても生き延びることができるが、一般の人々は無残に殺されてしまうのである。

「ケイ、セーブポイントをもつと増やせないか?」

ケイが、小首を傾げてうーん唸りながら眼鏡をいじる。

「ジリオンも今、手一杯で、三箇所以上は増やせないみたい

「そつか……」

街中で、何百人の死体を見た。

どれも無残な死に方だった。

かみ殺されたり、引き裂かれたりする他に、スキルを使われて焼け焦げになつた者もいる。

モンスターからすれば、一般の人間が雑魚キャラなのだ。

「うわー、やっぱあ……」

「どうした？ ケイ」

「またレイドがポップしちゃいましたあ。んで、S区の自衛隊が出動しちゃつたみたいですよ。本当はこういう時の為の緊急プログラムが発動されるんだけど、あーダメですよ。完全にぶつ壊されましたあ」

ハッカーが送つた【ウイルス】は、今も活動をしている。  
そして、ケイたちウイルス駆除システムがフル稼働しても、システム深く潜つてしまつたウイルスは潜み続け破壊を行つていた。

「なら俺が行く。どうせ入野祐平じゃ何もできないし。ケイは【サチ】作業に専念してくれよ」

龍樹が、ケイの肩をポンと叩く。  
ケイがコクンと頷いた。

「わかりましたあ。祐平さんにお任せします。でも一人じゃ厳しいと思うのでランチヨムさんと合流してくださいねえ」

今度は龍樹が領く番だ。

「ハハは任せて！俺、頑張るよ！」

「頼んだぞ！」

ハハを残して、町を駆け抜ける。

奇妙な月の下、モンスターの遠吠えを聞きながら龍樹は疾走した。

「今だ！一斉掃射始め！！」

ダダダダダダダダダダダダダッ！！

ドッカ――――――ン!!

掛け声と共に、いくつもの弾丸が飛び交った。

戦争並の特殊火器が使用されているのは、拳銃やライフル銃では、かすり傷も負わせる事が出来ないからだ。

材質不明、目的不明、正体不明、何もかも不明の未確認物体は、口  
と思われる穴から火炎放射をして応戦している。

「うわああつーーー！」

五対十本生えている足の一つが、装甲車を踏み潰した。巨大な火の柱が爆煙と共に上がる。

# まるでリアル怪獣映画。

特撮と呼はれてるスクリーンから抜け出しきたかのような間抜けな光景だ。

まるで、カニ料理で有名な店の看板を真似して、ふざけて造ったかのような姿をしている。

体は黒く光ったメタリック。  
見るからにロボットだ。

だが、それは人工知能で動かしているのか、それとも誰かが操作を  
しているのかの判断もつかない。

身長は五メートルくらいある。

横幅は甲羅と巨大なハサミで、その倍はあるだろ？

とても正気の沙汰とは思えない光景だが、自衛隊は『蟹』を相手に  
苦戦を強いられていた。

「隊長！ また、球体に戻りました……」

若い隊員が、涙声で通信してくる。

なぜか……巨大な蟹は、ある一定のダメージが加わると巨大なボーリングのような球状に変化するという行為を繰り返していた。

こんな不可解な出来事が起こったのは、昨日の夕刻からだ。  
突然、犬や鳥が人を襲いだし、なんとか倒すと、それはロボットの  
ようなものでできていて、しかも倒すと跡形もなく消えてしまう。

大東幸義ダイトウユキヨシは、このふざけた惨状がまったく笑えなかつた。

自衛隊に所属してもう十五年が経つが、こんな珍事は初めてだ。  
しかも、なぜか外部とまったく連絡が取れない。

電話もネットもつながらない現状で出動したのは自己判断だつた。

始めは、自分の頭がイカれたのだと思った。  
頭の上には、目を持つ奇妙な月が浮かんでいる。  
おかしいのは、それだけではない。

何もかもが、おかしかつた。

まず、S区から出られない。

道路は遮断され、壁のようなもので塞がれている。

まるで空間が切り取られたかのように、S区から逃げ出すこともできぬのだ。

大東の隊はタベ出動命令が下され、そのまま居残る形となつた。他の隊も出動しているはすだが、連絡が取れないので合流することができない。

既に怪我を負つた隊員は三十名近く。そのうち五名は重傷だ。

死亡者こそまだ出でていないが、時間の経過と共に被害は拡大していく一方だった。

「一体、何なんだあいつは！？」

と、イライラ混じりに思わず怒鳴ってしまう。いくら攻撃をしても倒せない。

それどころか、口から火を吐いたり手からビーム光線のようなものを発射したり大暴れだ。

球状に戻ると一切の攻撃を止める。

だが、それも小休止程度で、五分も経たないうちに蟹の姿に戻ってしまうのだ。

隊員達の疲労もたまつてきている。

これと言つて対応策もない現状、彼らは、いつ壊れるかわからない  
いや、倒せるのかも分からぬもの相手に、延々と攻撃を続  
けていた。

「撃てー！撃て！撃て！撃てー！」

大東には、もうそれしか言う事がない。

その攻撃の合間を抜けるように、ヒラリと人影が舞い降りた。

「あー、ダメダメ！今、攻撃しても弾の無駄だ」

隊員達が、一斉に見上げる。

その少年は、銃機器を積んだ特殊装甲車の上に立っていた。

「はあ？！何やつてんだ、あのガキはー！」

と、大東は口をあんぐりと開けた。

背は高いが、横顔は、どうみても子供。

まだ高校生くらいの青年だ。

しかも茶髪に遊んで作ったかのようなふざけたガクラン姿で、両手  
にはトゲの付いたナックルをはめている。

どう見ても、アニメに影響されたコスプレにしか見えなかつた。  
もしくは気が狂つたアホだ。

「君ー！今すぐ、そこから降りなさいー！」

大東は、すぐさま拡声器を手に持ち張り叫んだ。

こつちは遊びでやつてるんだじやないんだ。

命がかかつてゐるんだ！ と、ゴツイ顔で睨みをきかす。

青年 霧谷龍樹は、振り返ると一いつ口こと笑顔で答えた。

「あなたが隊長？」

「とにかく、そこから降りなさいーーこれは危険だ。直ぐに避難をーー」

できるだけ諭すように声の質を変える。  
だが龍樹は、聞く耳を持たない。

「あいつは、今【回復】をしている。体力が一定の数値まで下がると、ああやつて戻すんだよ」

「な、なにい？！」

あの青年は、この化け物を知っているのか？  
大東が太い眉を眉間に寄せる。

例えそもそも、こんな子供を戦場に置いておくわけにはいかない。

「今度、体力が下がつたら【俺たち】が最大のスキルで止めを刺す。  
そつちは、攻撃を止めてくれ」

もはや、何を言っているのかも理解不能だ。  
いや、何を言っているのかは分かつていい。  
かなりふざけた指示だ。

この状況で自衛隊が突然現れた青年の指示に従うなど、馬鹿げている。

それに、これじゃ、まるでゲームだ。

何が体力だ。

何がスキルだ。

大東が、怒りで体を震わせる。

こんな子供のたわ言に付き合っている暇は無い。

「隊長、どういたしますか?！」

年若い隊員が大東に近寄つてくる。

「子供は無視しろ。今はかまつていいる暇が無い」

「いや……ですが……」

なぜか、隊員の口調が歯切れ悪い。

「俺も……同じ事を思つていたんです」

「はあ?！」

大東が間抜けな視線を返した。

まだ若いが彼も立派な自衛隊の隊員だ。

その青年が、大真面目で口答えしてきた。

「お言葉ですが隊長、俺も、あの青年と同じ意見です。あいつは、今回復をしているんじゃないかつて思つんです」

「お前……何を言つてるのか……」

「分かっています。俺は十分に正氣です。でも、あまりにも自分が知つてゐるものに似てゐるんです」

「一体、何に似ているというんだ?」

「最近、非番の日に遊んでいるネットワークゲームのモンスターです。同じ仕様かどうかまでは分かりませんが、姿と攻撃スタイルはそっくりです」

大東は開いた口が塞がらない。

「それ」「……彼も似てるんです」

と、隊員が茶髪の青年を見上げた。

「マイマスター、霧谷龍樹に……」

その小さな少年は、自分の身の丈ほどありそうな長身の銃を構え、スコープで遠くに見える巨大な蟹を見ていた。

……あいつら邪魔

【ジリオン】に開通してもらつた、パーティートークという特化音声チャンネルで、龍樹に話しかける。

おかげで、遠く離れていても音声が通じるようになった。

これはEWのパーティチャットに値する機能だ。

まあ、仕方ねえよ。信じろって方が無理だろ

そりやそうだけどさ。最大スキル撃つても障害物があると火力が落ちちゃうんだ

俺は、お前の腕を信じてるぜ

ランチョムと美寿々の重なつた心臓がトクンと鳴つた。

絶対に、龍樹には見られたくない顔をしているのが自分でも分かる。頬が、かーっと熱くなり鼓動が早く打ち出したのを感じた。

だめだ。

落ち着け！

頭をふつて邪念を払う。

スナイパーに必要とされるのは冷静沈着な判断と一ヒルな姿勢だ。

俺たちは、ビッグ・クラブの体力が残り十%を切るタイミングで同時攻撃をすればいい

その合図は、口から溢れ出す黄色い泡だ。

EWの中では、もう何度も倒している。

だが、いくら英雄だとしても、たつた一名の討伐は始めてだった。

……あいつらが邪魔しなければいいけどね

やる前から失敗する事を考えるな。大丈夫。俺たちならやれる

……

ランチヨムが力チャリと流星銃を構える。

待機しているのは、少し離れたマンションの屋上だ。

ビッグ・クラブを囮んでいる自衛隊の位置と、龍樹が立っている位置を考えて少し場所を移動する。

通常のライフル銃では、ありえない射程距離だが、流星銃なら弾が届く範囲だ。

いや、正確に言うと撃つのは銃弾ではない。

英雄だけが使える、スナイパー最強の必殺攻撃を撃ち込む予定である。

ボクは、あなたの指示に従うだけです。リーダー

EWの世界では、まともに会話をした事もパーティを組んだ事もなかったのに。

まさかこの世界で、この現実の世界でパーティを組むなんて思つてもみなかつた。

ランチョムにとつても龍樹は憧れの存在だ。

その龍樹とのミッションを失敗させるワケにはいかない。

ビッグ・クラブが元の姿に戻った。  
相変わらず自衛隊の砲撃は止まない。  
HPが、削られていく。

五分……十分……十五分……。

僅かずつだが、ダメージが蓄積されていった。  
ビッグ・クラブが黄色い泡を吐き出した。

よし、行くぞ！ランチョム！！

龍樹がスキルの詠唱を始める。

「なつ、何だ？！」

大東は空を見上げた。

雨雲など見当たらないのに、雷鳴が鳴り始める。

「【ビッグ・サンダー・アタック】です！ 隊長、攻撃をストップ  
させて下さい！！」

「は、はあ？！」

隊員が、放心状態の大東から拡声器を奪つた。喉が張り裂けそうなくらい大声で叫ぶ。

上空から地上へと稻妻が走った。

大東が口をバクバクとさせた。  
稻妻が、龍樹の体に降りていく。

ビッグ・サンダー・アタック！！

青年が、装甲車の屋根を蹴り上げ、蟹に向かって一直線に飛んだ。

## フュニッケス・ボンバー

同時に、流星銃から巨大な火の玉が放射される。

大きな蟹の化け物が爆炎を上げた。  
真っ黒な煙を上げて、ピタリと動きを止める。

11

大東は、金縛りにあつたかのように動かない。  
ブスブスと動かない蟹の化け物の前に、あの茶髪の青年が立つてい  
た。

普通なら、まともなら、あの爆発に巻き込まれているはずだ。  
だが、青年はダメージを微塵も感じさせない爽やかな笑顔を浮かべ  
ている。

「ミッション、クリア」

呆気に取られている自衛隊の中を、龍樹は悠然と歩いていた。  
ビッグ・クラブの死体が、点滅を繰り返した後、消えていく。

「あ……ありえんだろ」

と、大東が頬をつねる。

こんな事を認めるわけにはいかなかつた。  
非現実過ぎる。

説明がつかない。  
ありえない。

「冗談じゃない。

「隊長……大丈夫ですか？」

「……俺は疲れているのか？」

「いいえ。これは現実です。俺も説明なんかできないけど。でも……」

若い隊員が龍樹の背中をじっと見詰めた。

「彼は英雄なんです。恐らく、この世界でも

「

青年の後姿が見えなくなるまで見送る。

英雄

それが、何を指し示すものなのかな。

今の大東には、理解する事が出来なかつた。

## 第一話

祐平と美寿々は、セーブポイントになつてゐる学校に戻つていた。ケイやしりょが逃げ惑う人を集め、かなりの人数が避難していたが、教室や体育館で身を寄せ合つてなんとか過ごしている。

二人は使われていなかいフレハブにいた。

元々、どこかの部活が使つていた部室だ。

埃まみれで力ビ臭かつたが、二人は静かな場所で休みたかった。もちろん龍樹とランチョムも一緒だ。

今は武器を外して、別々になつていた。

キャラクターと同化している間は疲れなどなかつたが、実際、中の二人はかなり疲労している。

祐平は、かなりの空腹と眠気に襲われていた。

混乱した世界になつたとはいえ、生理的な機能は無くなつていないので。

壁にもたれかかって座り、ぐつたりとした祐平を見て美寿々が立ち上がる。

「入野くん、私、食べ物探してくる」

フレハブから出ようとすると美寿々を祐平が引きとめた。

「待つて。それなら僕が行くから」

いくらなんでも、女の子にそんなことはさせられない。プライドだけで動こうとすると、頭がくらりと揺れた。

「入野君は私よりもずっと長く同化してたし。龍樹の方がずっと体力を消耗すると思うから気にしないで」

「そんなこと、ないよ」

祐平が立ち上がるとして、膝ががくつと下がった。

「おつと」

龍樹に支えられ、なんとか立ち上がる。

「んー、今は根岸さんに甘えた方がいいぞ。お前、足にきてるし、ランチヨムならスキルで姿を消せるしさ」

言われてみればその通りだ。

自分が動くとなると龍樹も一緒に動かなくてはならない。

今は、龍樹もEPを戻すためにプレハブで座っている。  
回復する術が、自然回復しかないからだ。

小さな子供がぴょこっと扉を開けた。

「大丈夫。直ぐに戻つてくるから。ボクも回復しないといけないし」

「ひつひつ時はお互い様にしょーよ」

そつ言い残して一人がプレハブを出て行く。

久しぶりに龍樹と二人きりになった。

今朝、喧嘩をして以来だった。

あれから一日も経っていないのに、ずいぶんと長い時間が経ったような気がする。

祐平は、昼に昭成に殴られた頬を摩つた。まだ、ほんのりと熱を持つていて触ると痛んだ。

「……兄貴、どうしてるんだろう」

急に静かになり、ふと一弒の事を思い出す。

夕べ、どこかに出かけたが祐平は所在も知らない。

「S区の外にいれば安全なんだが。このバイトかも知らねーし。迎えにも行けねーな」

祐平が知らないことは、もちろん龍樹も知らない。電話では新しいバイトとしか言つていなかつたので、まったく検討もつかなかつた。

今は携帯電話もつながらないので連絡を取る手段もない。龍樹とランチヨムのようにパーティートークでつながることもできないで、非常に不便だ。

自分が兄の心配をすることがあるなど、思つてもみなかつた。いつもなら、どちらかと言えば心配をされる方である。

いや、それもないか。と、祐平は顔を膝の間に埋めた。

もしかしたら、この混乱で忘れられているかもしれない。その可能性は十分にあつた。

それでも……。

こんな時に限って、子供の頃の兄を思い出す。

絵本を呼んでくれたり、一緒に風呂に入ってくれたり。

子供の頃の一人は仲の良い兄弟で、一弥は良い兄貴だった。

「フル充電したら、マンションに戻つてみるか？」

「あ……でも……」

自分に遠慮するのも変だが、あまり他の人を巻き込みたくない。  
龍樹は他人ではなく、ある意味自分だったが、一弥との関係をよく  
知つてるので返事の歯切れが悪くなる。

「俺はランチョムともケイとも通信できるし。祐平の回復次第だけ  
だぞ」

「うん……」

今は、そんなに仲の良い兄弟ではないが、それでも生きていて欲しい。

それに兄貴が死んでしまつたら、両親が悲しむ。

すーっと意識が遠のいていく。

龍樹に寄りかかりながら祐平は寝てしまつた。  
美寿々たちはまだ戻つてこない。

ほんの僅かな戦士の休息だつた。

「きや――――――――――――」

その悲鳴で、一人は目を覚ました。

校庭の方から、次々と悲鳴が聞こえてくる。  
龍樹が立ち上がり、祐平も後に続いた。

プレハブから出て、その光景に睡然とする。

「これ……は……」

目の前に広がるのは、死体の山だ。  
モンスターではなく、人間の！

「祐平、武器を装着するぞ」

祐平が大きく頷き、龍樹と融合する。

この場所は【ジリオン】がモンスターを寄せ付けないようにしてあ  
つたのに、無効になってしまったのだろうか。

「ダブル・パンチ！」

「ぶはっ……」

ファイターからスキルを食らい、中年の男性が真っ赤な血を吐いて  
倒れた。

簡単に死んだ人間を見下ろし、男は楽しそうに革のブーツで踏みつ  
けている。

「……お前」

龍樹がぎりっと奥歯を噛んだ。

緑色の髪に青い瞳のファイターは、EWの世界で何度か見かけたことがある【血の契約】のメンバーだ。

「……ひつ、た、龍樹？！」

田が合図と、男はじりじりと後退していった。

龍樹が、怒りに身を震わせながら拳を振り上げる。

「スクリュー・アタ……ガツ」

詠唱をキャンセルされ、撃たれた胸元に氷が広がった。  
スナイパーのスキル、コールドブリッジで撃たれたのだ。

「……どいだ？！」

視界をぐるりと回して隠れているスナイパーを探す。  
他にも仲間がいる。

だが、ここは校庭で遮蔽物も障害物も少なく、上から狙われれば絶好の射撃ポイントだ。

「ロックストライク！」

「ラッシュスピinn！」

「チャージ！」

意外な方向からスキルを食らつた。

「うがつ

龍樹が、前方に弾き倒される。

背後からクラッシャーとトリックスターの攻撃をもろに受けた。しかも、回復役のトルーパーまでいる。

「……チツ」

龍樹は、即座に立ち上がり舌打ちしながら地面を蹴つて間合いを取つた。

【血の契約】の奴らは、少なくとも五人いる。自分達と違いパーティ・トークはできていないと思われるが、ずっと行動を共にしてきた奴らだ。連携を取るのは慣れている。

「まさか、こんな所で会えるとは思わなかつたわ、色男さん」

女の姿をしたトリックスターが、濃い化粧顔でニタリと笑みを作つた。

ゲームの中では龍樹を見ると逃げ回つていたクセに、今は自分達の方が有利だと立場を理解しているらしい。

もちろん、このメンバー相手で一対一なら負けない。だが、五人のフルパーティ相手だと完全に龍樹の分が悪い。

「なぜ、人を殺す？！」

「ふつ……あはははははははははははは！ こんなに楽しい狩り、最高

じゃんか。今までさんざい、俺を「ケにしてきた奴らを虫みたいに殺せるんだぜ？」

完全に、漫画や映画に出てくる悪役だ。

どんなにゲーム内では残酷でも、中身は普通の人たちだと思つていた。

いくらなんでも【現実】の世界で人を殺しまくるなど、信じられない。

「いいじゃん。どうせ世界が壊れちやつたんだし。最後くらい楽しんだほうが勝ちだろ」「

彼らは壊れていた。

もう、元の世界に戻れないと思つているのだろう。

説明したいが、レベルHの情報を話さなくてはいけなくなる。

ケイを呼ばなくては。

そんなことを考えている内に、再び攻撃に襲われた。

「ポイズン・スピンドル！」

体が毒に侵される。

「ヘル・ブリッツ！」

徐々に体力を削られたが、龍樹も反撃を開始した。  
トリックスターの女にスキルを撃ち込む。

「チャージ！」

だが、即座にトルーパーに回復をされた。

「スクリュー・アタック！」

「ラッシュスピニング！」

「バーストスクリュー！」

前衛三人の攻撃に加え、スナイパーからも弾が飛んでくる。龍樹一人に、集中砲火だ。

「まずい……」

龍樹は、せめて回復役がいれば持ち堪えられるのにと歯噛みをした。五人ともレベルはさほど高くはないが、回復をするトルーパーと、毒だの足止めなどのスキルを使ってくるトリックスターが厄介だ。

それでも 倒すしかなかつた。

倒さなければ、自分がやられる。

「ダブル・パンチ！ ヘル・ブリッツ！ スクリュー・アタック！」

スキルの三コンボで、エネルギーがガクツと減つた。

その代わり、トルーパーが戦闘不能に陥る。回復役から叩くのが常套手段だ。

「くそつ！ ミーナがやられた！ お前ら、最大スキル連打だ！」

トルーパーがやられ、男達の間に動搖が走った。

指揮を取っているのは、クラッシャーの男だった。

宙太というキャラクターで、【血の契約】でも特にタチの悪いギルドマスターとして有名だ。

極悪非道、残虐で冷酷。

彼の指揮は常に冷静で的確だったが、まだこの環境に慣れていないらしい。

だが龍樹の体力は、もう残り僅かだった。

ここで最大スキルの応酬など食らつたら、死んでしまう。

ファイターに防御系のスキルなどない。

もともとソロタイプではなく、パーティ型のキャラクターだ。

これまでか。と、さすがに考える。

いくら龍樹だつて不死身じゃない。

ゲームの中でも何べんも死んでいるし、パーティを相手に回復なしで戦闘するのは無理な話しだった。

「フル・チャージ！！」

「え？」

龍樹の目が大きく見開く。

全身に力がみなぎった。  
体力もＥＰも、満タンだ。

考えるよりもスキルが先に発動する。

「スクリュー・アタック！」

トリックスターの女が、後方に吹っ飛ばされた。  
ファイターとスナイパーの攻撃は食らつたが、体力が半分も削られていらない。

いける。

「ヘル・ブリツツ！」

「ダブル・パンチ！」

ファイター同士でやり合っていると、宙太が逃げていく。

「ちょ！ 宙太さん！」

見捨てられたファイターは、スキルの応酬を食らい地面に蹲つて動かなくなつた。

倒れた三名が動かなくなつたのを確認して、龍樹が装備を解除する。  
体から離れた祐平が、ハアハアと荒い息を上げてぐらりと倒れた。

「祐平！ 大丈夫か？！ 祐平！」

龍樹に抱えられ、薄つすらと目を開ける。

龍樹の体力が回復しても、祐平は疲弊していくばかりだ。

「さすがに、彼を回復させることはできない。どこかで休ませよつ

「凛とした通る女性の声。

祐平を見下ろす、その端正な顔立ちは見知ったトルーパーである。

「愛……燐……来てくれたんだ」

愛燐アイリンは、祐平を知らない。

だが、その彼を抱えている英雄はよく知っている。

「よく来たな。事情はケイから聞いているんだね？」

龍樹が、愛燐と向き合つた。

「ケイ？」

と、愛燐が細い眉をひそめる。

「ああ、あのシステムの末端だというふざけた女子高生か？」

「あー、俺んとこはメイド服着てたぞ」

愛燐が、僅かに口元を緩ませた。

「大体は聞いている。この世界で死ぬと、中身も死ぬらしいな」

ウイルス駆除システムには、開発者の趣向で色々とバージョンがあった。

どちらにせよ、愛燐も全てを知った上で駆けつけていたのだ。

「それで、よく来たな」

と、龍樹が関心をする。

「俺がいないと困るだろ？ 俺はどここの世界でも英雄でありたいしな」

惚れ惚れするような男っぷりだが、見かけは女神のような美しい女性である。

長く伸ばした髪はプラチナブロンドで、まつ毛の長い切れ長の瞳は碧眼だ。

龍樹が祐平を抱えてプレハブに戻ると、美寿々も食料を抱えて戻ってきた。

スキルで透過していたランチョムも姿を現し、愛燐を見て驚いている。

「ランチョムか」

「愛燐……」

「どうやら、全ての【英雄】に声がかかっただしい。

そして愛燐が駆けつけてくれたのだ。

ゲームの中では冷たい印象だったが、中身は熱い人だった。

そして、さつきの戦いで愛燐がいなければ龍樹がやられていた。  
感謝してもしきれないくらいだ。

「んもう。【血の契約】の奴らに襲われたんなら、なんでボクを呼ばないの？」

ぐつたりする祐平を尻目にランチョムが口を尖らせる。

そうは言われても、彼らを呼ぶ暇なんてなかつた。

奇襲は【血の契約】の常套手段であり、撤退が早いのもいつものことだ。

「悪かつたな。次は必ず、お願ひするよ」

龍樹が頭にポンと手を乗せると、ランチョムが子供のように小さく頷く。

美寿々は黙つていたが、祐平の横顔を見ると深い溜息をふつと吐いた。

今、祐平を支配しているのは疲労と罪悪感だ。

いくら【敵】とはいえ、【血の契約】のキャラクターを中身の人間ごと殺してしまつたのだ。

キャラクターは單なるデータに過ぎないが、中身の人間は地下で凍結している同じ人間である。

つまり、非常事態とはいえ人殺しをしてしまつたのだ。

人間と融合したキャラクターを殺すということは殺人なのである。

ヒロシを止めておいて、自分の手を血で染めてしまった。

いくらゲームの中で殺し合いをしているとはいえ、実際は普通の高校生である。

人殺しといつ重みに耐え切れず、祐平はプレハブに戻つてから一言

も声を発していない。

例えようもないくらいのショックに、すっかり打ちひしがれている。正常な世界に戻れば、一体、自分はどうなってしまうのか。そう考えただけでも、気が狂いそうだった。

殺されるから、その前に殺す。

ゲームの中では日常的だった状態が、リアルで襲い掛かってきた。

「さつき、美寿々と商店街のコンビニまで行つたけど、酷い有様だつたよ」

町は死体で溢れ、モンスターが闊歩している。セーブポイントを作つて避難させても、キャラクターは自由に出入りしてしまう。

この世界に安全な場所などない。

常に死と隣り合わせで、人間さえも敵になる。

「入野君、お水……」

美寿々がペットボトルを差し出す。

祐平は、焦点の合わない瞳で受け取つた。

「龍樹……」

「どうした？ 祐平？」

龍樹が隣に座る祐平に顔を向ける。  
祐平が疲弊しきつた顔を俯かせた。

「僕達は、何と戦つてるんだ？」

その質問に答えられるものはいない。  
一体何と戦つているのか。  
もう、その理由も原因も分からないくらい世界は狂つてしまつている。

「あの……愛燐さんも、どうや？」

美寿々が、壁際に立つてゐる愛燐にペットボトルを差し出す。  
愛燐の体が一重にぶれ、初めて中身の男が姿を現した。

祐平たちよりも、ずっと年齢の高い大人の男だ。  
色が白くて線の細い、儂げな印象の男だつた。

「ありがとう」

男はペットボトルを受け取ると、薄い笑みを返す。  
美寿々は、少し驚いたように彼を見つめている。

「もしかして……久我原結也さん……ですか？」

そう聞かれると結也が、苦笑いを浮かべる。

「うん、そう。驚いたでしょ？　愛燐の中身が、こんなおじさんで」

美寿々がいいえと首を横に振る。

「そんな……驚いたのは本当ですけど、まさか久我原さんだつたなんて……」

祐平＝龍樹も、その名前には覚えがある。

最近、姿が見えないが前はドラマや映画に出ていた俳優だ。もつとも、その手には疎いので顔を見て久我原結也だとは思わなかつた。

龍樹も、驚いたように結也を見上げる。

「僕も驚いたよ。EWの英雄が、こんな可愛らしい高校生だつたとはね」

祐平も、少し反応していた。

MMOは大人の人が多いとは聞いていたが、まさか中身が芸能人とは思わなかつた。

「休養宣言だなんて格好良いこと言つてるけど、本当はもう精神的に追い詰められていてね、芸能界の仕事はほとんど引退だつたんだ。情けないよね。ちょっと親友に裏切られたくらいで、仕事まで手につかなくなつたんだよ。EWをやり始めたきっかけは、ほんのリハビリのつもりだつたんだけど、自分で信じられないくらいハマつてしまつた。おかげで、30過ぎの英雄のできあがりだ」

自虐的な笑みを浮かべながら、愛燐の方に顔を向ける。  
硬質の美女は、薄つすらと口元を緩めるだけだ。

「俺は、それなりに楽しんでいるよ。相変わらず人との壁を取り払

「う」ともできないみたいだけど

「やつ……だね」

一人で顔を見合せながら、ふつと小さな息を吐く。

「ここに来る時も、すごく緊張をした。もしかしたら、うざいって思われるかもしないって思つたら足が竦んだ。かなりの人間不信だつたし、人との距離がつかめなくて。でも、君たちが戦っている。そして僕を必要としているって女子高生から聞いた時に、ああ、僕はこの世界でも英雄でありたいって思つたんだ」

それまで、じつと俯いたまま独白を聞いていた祐平が顔を上げた。年齢は30を超えているが、まだ二十代の青年にしか見えない整った顔立ちを見つめる。

「僕は……久我原さんが来てくれて助かりました。口下手なので上手く言えませんが、感謝しています。助けて頂いてありがとうございます」

「龍樹は、僕に取つても英雄だよ。ゲームの中の君を見ていると、こっちも勇気が沸いてくる。それに……」

と、結也がいつたん言葉を区切る。

そして、何かを思い出したように、ふつと笑みを零した。

「龍樹がいるからこそ、正義の味方も悪くないって思つたんだ」

「そつ……ですかね。僕は、本当は、そんなに英雄にはこだわっていないんです。ただ、あの時は自分が英雄になるのが一番良い方法だ

と思つたから

「でも僕らは、そんな龍樹に憧れていきたいんだよ」

そう言わると、反対に居心地が悪くなつてきた。

龍樹はあくまでもゲームの中の人格で、本当の祐平は、情けないへ

タレの苛められつ子である。

龍樹を褒められるのは嬉しい。

彼には誇れるものがいくつもある。

「僕は……入野祐平には何もありません。ただの頭の悪い高校生です」

保存したけど、まだ途中です（汗

パン

その小気味の良い音に、プレハブ内の空気が一瞬固まる。祐平が、龍樹に頬を叩かれたのだと自覚したのは、数秒後のことだ。

「龍……樹……」

自分がキャラメイキングした精悍な顔でギロつと睨まれる。祐平は、熱く腫れた頬に手を当てたまま硬直していた。

「なに一人で勝手にイジケてんだよ。お前、本当に俺の中身の人？」

力ツとなり、龍樹の胸倉に掴みかかる。殴られるのは慣れていたが、龍樹に体を傷つけられるなんて、許せない。

「お前、また僕に説教する気か？！」

お前がだらしねえこと言つてつからだ

「仕方ないだろ！ これが現実なんだ！」

龍樹が、ふんと鼻を鳴らす。

「」こんな状況でよく言えるな。」これだって現実じゃねえ。いや、それも違うな。全てが現実で、全てがお前だ」

「違う！ 僕が龍樹でいたのはゲームの世界だったからだ」

ヤレヤレと龍樹が首を横にふる。

二人の口論を、結也と美寿々は黙つて見守つていた。

「前にも言つただろ？ 僕がお前の本質。勘違いしてるヤツも多いけど、ゲームの中つてのは一番本人の『素』が出るもんだ」

「それは……分かつてるけど」

「ゲームのキャラクターは、違う自分を演じているんじゃなく、しがらみのない世界で本当の自分を曝け出しているんだ。リアルの世界で真面目な人間が、ゲームの世界で本物の悪党にはなれないのと同じで、祐平もリアルの世界で英雄になれるんだよ」

「冗談じゃないよ！」

祐平が掴んだ服を手放した。もつとも、ここで取つ組み合いの喧嘩をしたつて勝てるはずもない。

「俺は冗談なんか言つてねーし。そもそも、この世界が冗談みてーなんだ。でも俺は逃げない！ 恐れない！ 怯まない！ 武器が装備できなくても素手でも敵を倒す！」

龍樹が、ぐつと拳を掲げた。

こうやって客観的に見ると、結構、恥ずかしい光景だ。

結也が小さく「ふつ」と吹き出す。

「あ、ごめん。別に、君たちのことを笑つたわけじゃない」

慌てて取り繕つたが、祐平が顔を真つ赤にさせる。

「この「う」というストレートなの、いいな。って思つて。でも龍樹の言つてることには当たつてゐる。僕も、ゲームの世界で違う自分を演じるつもりだつたんだけど、ほとんどリアルと変わらない性格になつてしまつたし」

愛燐がすつと目を細める。

「そうだな。俺は口数が少なく、ぶっきらぼうで愛想のない冷たい感じだと言われている。リアルの、お前の評判そのままだ」

「でも、ここでの僕はおしゃべりだ

「ああ、そうだな」

愛燐が、クスッと小さく笑つた。

「お前がこの子たちを気に入っているということは、俺も知ってる

美寿々がポつと頬を紅潮させる。

「あ、あの、私も、龍樹の言つ通りだと思う。みんなからは大人しいって言われてるけど、本当はロボットもののアニメが好きだし、

格闘技の試合を見に行くのが好きだし、その……」

「言いにくそうにモジモジしていると、ランチョムがクッククと楽しそうに笑う。

「美寿々って、ホント、ガンオタなんだよな。初めて僕をプレイした時なんて、興奮で連続二十時間もプレイしちゃつてわ」

「ほらー ランチョム！」

美寿々がポカポカラランチョムの頭をぶつっていると、プレハブ小屋の扉が一気に開いた。

それまでの、まつたりとした空気が一転し、緊張した空気が流れる。

見知った顔に、龍樹が右手を上げる。

「よひ

「いた……」

「よつじやないですよ！ もーつ、俺、くたくた。ケイさん、あんなに可愛いのに人使い荒いし」

がっくりと憔悴しきった感じで現れたのはヒヒだ。

「あれ？ その姿だと疲れ感じねーんじゃ？」

「さつき、武器を解除して元の姿に戻ったんですよ。そしたら立てこられないくらい疲れてて、装備してもこんな感じで……え？」

「うーーーがプレハブの中をキョロキョロと見渡した。美寿々と田が合  
い、『ぎょっと田を見開く。

「根岸さん？！」

「え？」

「ちよ……もしかして、このみなさんは中の人？」

「うーーーの問いに、龍樹が「ああ、そうだよ」と答える。

「もしかして、君たち三人とも同じ学校の生徒？」

「えー————、久我原結也？」

今度は、結也の姿を見て気を動転させた。

その隣にいる愛燐が、つるわせつに僅かに眉をひそめる。

「な、なに、この英雄大集合は…」

「興奮するのもいいが、お前も武器を解除して中身を休ませろよ。  
充電もしておいた方がいいぞ」

龍樹に言われ、うーーーが「は……はい」と武器を解除した。  
祐平と比べると、かなり体格のいい坊主頭の青年が現れる。

「ど……ども。なんか、これ恥ずかしいっすね」

美寿々が「あつー」と指をさす。

「荒垣君？」

荒垣要が、太い腕で「ははっ」と頭をかく。

「まさか、こんな所で知り合いに会つとは……しかし、驚き。まさかランチョムの中身が根岸さんとは……」

要がチラリと祐平を見る。

祐平は、あまりにもゲームをして居るよつには見えない体育会系の青年に驚いていた。

「あー、ええっと……龍樹の中身さんですよね？」

「う、うん」

「こりゃまたイメージと違つていうか……もっと大人の人だと思つてた」

「入野君は私と同じ高校なの」

美寿々が祐平の代わりに説明すると、要は氣まずそつに頭を伏せた。

「そ、そつか。いいなあ。俺はヒキオターネトです」

「高校、行かなかつたんだ」

「あー、俺、中学の時、イジメに会つて登校拒否しちやつて。そのまんまなんすよ」

と、苦笑いを浮かべながら言ひにくそつに付け足す。

「大丈夫だよ、荒垣君。僕だって、三十過ぎてるのにヒキオタート生活してるから」

結也が一コリと笑顔を向ける。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5063y/>

---

Electric World

2011年12月7日22時49分発行